

ふみこ句日記

吉川ふみ子

2000/5/51

目次

| | | |
|-----|---------|-----|
| 第1章 | 野仏 | 8 |
| 第2章 | 水無瀬 | 16 |
| 第3章 | 水無瀬 | 34 |
| 第4章 | 平成 | 62 |
| 第5章 | all | 108 |
| 第6章 | 母お気に入り句 | 134 |
| 第7章 | 年表 | 136 |

はじめに

昭和四十八年九月浅野房子さんと三朝温泉への車中、山下光子に出会ひ三朝の病院に療養中の大塚さんを見舞う旅だったが、話は吉川美佐姉のすすめにより京鹿子火曜教室に浅野さん 小田澄子さんが入会

九月初旬会に出席した様子だった。私も一か月おかれて 十月よりともかく出句した。

造る書くと言うことには全々自信のない出発だからあまり進んだ気持ちでは」なかつた。以来 もう止めるを繰り返した。美佐さんへの義理を続けていると言った。

そして十八年の年月が過ぎた。納得のいく自分の句句は殆んど無い。

個人で句集を作られた句友も何人があるが 火曜火鏡 合同句集の仲間入りが精一杯のこと、それ以上自分の句を活字にのこすことは考えてもいなかった。けれどここ数年前から句日記として 整理してみようと思ひ立った。下手、句になっていない句 それでよい。思うばかりでなかなかとりかかれないで 二、三年は過ぎた。

今回 玉造温泉 厚生年金会館 保養ホームに入所 山下さん 悦子さんと合流するまでの一週間 一人の機を得て漸く一頁をかき出し始める。振り返り見る十八年 記憶確かでないものもあるが思ひ出は楽しい；

3
·
8
·
26





第1章 野仏

吉祥会で大森先生 池永先生と一緒に当尾の石仏を巡りて

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

「草紅葉」兼題 幼き日の思い出

日を浴びてままごとの子や草紅葉

「顔見世」 去年は文友会で顔もせに。今年はただ思い出のみ

顔見世の名残を夢に見しも去年

お隣の浅野まゆみさんかわいい日本髪で

髪結ひて寝ず娘は待つ初詣

相川北通りの家根笹の中で狂い猫

猫の恋根笹の乱れ昨日今日

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 49 | 49 | 48 | 48 | 48 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 2 | 1 | 12 | 10 | 8 |
| ・ | ・ | ・ | | |

上京の車中 浜松あたりで遠連山をみて

山の色幾重の果の雪解光

49
・
2
・

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

48
・
9
・
0

「水草生まふ」 兼題 日浅い私には大変むつかしい。ふと一善の車で探梅につれてもらった時
賀名生 だったかそして仁徳陵ところを走ったことを思い出す。

陵の薄陽の濠も水草生ふ

49
・
3
・
0

「春の雪」 兼題 直子さんの縁談がまた立ち消えた。

娘の縁談又もこわれぬ春の雪

49
・
3
・
0

一つの旅を終えりとまた次に心は走る。

花過ぎぬいづこともなき旅心

49
・
4
・
0

「桐の花」 兼題 小森田さんとあわくら荘に 帰りは姫路までバスにした。

山裾の雨に煙れる桐の花

49
・
5
・
0

「草の花」 兼題どこで得た句かはつきりしない。

野仏の顔かくすまで草の花

49
・
9
・
0

山下さん 小森田さん 青山さん 四人連れ 児玉東洋さんの車で佐多岬 桜島 霧島と廻っていただく。
別れて高千穂の国民宿舎に泊った夜 高千穂神社の夜神楽をみに行く。

夜神東の明りに映ゆる銀杏黄葉

49
・
11
・
0

「炬燵」兼題 一人暮らしの私の句だと浅野さんの御主人がはやす

置炬燵向ふ人なきあで蒲団

49
・
11
・
0

「年用意」 丹波から週二回野菜その他を積んで車が来る大塚「きく」の前でとまる。

大塚ののぶ子さんが電話で「丹波よ」と相川の店へしらせてくれる。

年用意丹波男の荷は売れ早き

49
・
12
・
0

小森田さんが名古屋から夕方までに相川へ着く筈になっているのに遅い

友待つに暮色刻々粉雪舞ふ

50
・
1
・
0

上京車窓より。

風ぬくき末黒野鳥群をなし

50
・
2
・
0

私は化粧水は使っていないが ふと出来た句

化粧水掌に冷えのなし春隣

50
・
3
・
0

「花曇」野崎詣りをしらの去年だったかと思う。

綿菓子も売れて野崎の花曇

花曇年甲斐もなき物忘れ

この様な軽やかな心に時もある

若やぎて夏来る歌口ずさむ

相川の家の軒に雀がいそかしげに出入りする

梅雨曇出入せはしき軒雀

相川の町の露地風景

花曇年甲斐もなき物忘れ

どこの寺院だったかなー

あらはなるちくり根洗ひ大夕立

「流れ星」この頃誰かが病氣をして心にかかっていた

看る夜の心もとなき星の飛ぶ

「空蟬」故かんげつ国分寺境内の礎石で遊んだ日をおもいだして

子等去りぬ礎石にならぶ蟬の殻

| | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 8 | 8 | 7 | 6 | 6 | 0 | 4 | 4 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 26 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 |

唐招提寺 観月の夜

大月夜唐招提寺の庭にイフ

「色鳥」山下さん青山さんと越前賤ヶ岳 長浜竹生島の旅

色鳥や朝の湖の小棧橋

「秋惜しむ」小森田さんと笑い乍らの出来たもの

秋惜しむほほ紅少こしさしてみむ

大塚さん「きく」の前に荷をおろす「丹波」のこと

新鮮と我から言ひて冬菜売

相川の座敷の庭に笹子の声がと井上さんからきく

独り居の朝茶の香り笹に来る

「大福茶」我が家は梅昆布茶が毎年のこと大福茶と思っている。

家長の座に心しまりて大福茶

「野焼き」あちこちに見る野火に次の命の芽生えを思った。

新らしき命を呼びて野火勢ふ

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 51 | 51 | 51 | 50 | 50 | 50 | 50 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 2 | 1 | 1 | 12 | 10 | 10 | 9 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

「春泥」 浄瑠璃寺への柊が浮かんできた。そして遠足の列が眼に入る。

春泥の径つき寺の小門あり

51 . 3 . 0

黄帽子水筒どの児の靴も春の泥

51 . 3 . 0

高山祭をめざして小森田さん 美佐さん 宮川ひでさんと下呂へ行く。折り悪し雨で宵の「曳別れ」はみることができなかったが車窓より禅昌寺の塔を眺めて

花の奥雨に煙れる塔のあり

51 . 4 . 0

小森田「さん 高田さんと妙高々原 穂高 と旅して 穂高の有明松尾寺にて、妙高々原にて

老鶯や御手の茶壺のかたむける

51 . 5 . 0

老鶯に唐松林行きにゆく

51 . 5 . 0

「落し文」 むつかしい兼題にふと昨年の賤ヶ岳を思い出して

湖見ゆる古戦場道落し文

51 . 7 . 0

亡妹貞子が死の近くなった頃梨をしきりにほしがった。梨の頃がくると思い出す。

病妹の欲りし日とあり梨供ふ

51 . 9 . 0

京都女専クラス会 九州志賀島 大宰府 柳川巡りにて

鐘楼に屋根草のびて露ふかし

51 . 10 . 17

四つ手網死魚の乾けり秋の声

51 . 10 . 17

「晩菊」相川の庭の菊 謡の小川先生のこと。

晩菊のうつろいはじむ白きより

晩菊やなほ美しくしき謡の師

耳の治療で大手町病院に通っていた頃

晩菊やなほ美しくしき謡の師

天満マーチャンダイズあたりにて

秋冷ゆる赤きストビラ散る舗道

相川の庭の垣をみて。

綿虫の籬越え来て雨を呼ぶ

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 51 | 51 | 51 | 51 | 51 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 11 | 11 | 11 | 11 | 11 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

第2章 水無瀬

西川さん 増田さん と淡路島健和荘泊り
帰途乗船場にて浅利貝を買う。

灘水仙郷 若人も森など巡る。

蛤の潮のしたたり出船待つ

東横線多摩川鉄橋通過

河原なる飛球の行方風光る

小田さんの案内で山下さんと三人で吉野山へ

吉野山春蘭の店は客呼ばず

相川の畑にて

花卉ゆれ奥より出でし虻の貌

相川の店二階の軒先に燕巢をつくる

| | | | |
|----|----|----|----|
| 52 | 52 | 52 | 52 |
| ・ | ・ | ・ | ・ |
| 4 | 4 | 3 | 3 |
| ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 5 | 0 | 0 |

燕の子黄ならびの嘴花のごと

あわくら荘に青山さん 西川さん 増田さん と。自然林のほうへ

木苺や山の佛の唇あせて

整くんが寝冷えしていた時

寝冷え子のうつろの瞳絵本散る

「蜜豆」ふとこんなこともあつたかな

蜜豆に唇さみし嘘を言ふ

一家の旅今津 海津大崎 竹生島 つづら荘泊り

八月も終わりに近い つづら荘の前の湖辺にて得た句

湖の色北より深み秋きざす

竹生島真向ふ宿の洗鯉

高野山登山ケーブルカーの窓より芒を眺めて

登るほど尾花は細し高野道

芒むらの眺めはあちこちに得られた。それに秋吉台の景を重ねて

行けど行けど穂芒波や夕茜

52
・ 5
・ 0

52
・ 6
・ 25

52
・ 7
・ 0

52
・ 7
・ 0

双
適入選
52
・ 8
・ 0

52
・ 8
・ 0

52
・ 9
・ 0

52
・ 9
・ 0

天高し隠岐の草原牛肥えて
霊場の鐘にも和さずけらつつき

小田から頂戴した紫しきぶが大きくなくて美しい実をたくさんに。
下枝より褪せて小庭の実むらさき

相川の家で お謡の小川先生御母堂白寿祝い

庭雀床払ひせしふとん干す

白寿祝ぐ願いをこめて羽根蒲団

相川の家元旦の水。若水を汲むにはあらねど。

若水や心新らたに栓開く

小田澄子さんの御親類 句友 藤田みや様の訃。

句友の訃夜を沈丁の香のせまり

淡路島への船中よりの景を思い出して

春潮に群れ飛ぶかもめ水尾追ひて

大森先生御他界 城陽大森家を訪ねる

中を開かない門のうちには花ゆらす

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 53 | 53 | 53 | 52 | 52 | 52 | 52 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 3 | 3 | 1 | 12 | 12 | 10 | 9 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

門かたく喪の家ひそと花ゆすら

潮騒の丘の花冷学徒眠る

小森田 美佐さんと淡路島行く

城跡の古井戸涸れず苔の花

四国八十八ヶ所札どころ巡拝

桑の実に郷愁ありて札所径

相川蒔田家の告別式だったか

焼香待つ黒幕裾の蟻地獄

八十八ヶ所霊場巡り（文友会） 最終回さぬき路

杖は本当に持ち帰り

葉鶏頭一筋町の故郷晴れ

結願の杖納め得し鴟日和

相川風景 よく花屋さん狭い路にも立ち入る

花売の残す菊の香路地の朝

53
・
4
・
0

53
・
5
・
0

53
・
6
・
5

53
・
6
・
0

53
・
7
・
0

53 53
・ 10
・ 10
・ 0

53
・
10
・
0

53
・
12
・
0

楽しんで相川の家えは沈丁花を挿し木いた。

すすく成長したかと思うと突然枯れもした。私はその香りがあまり好きでなかった、気になる匂ひだから何とか句材にした。

昂りぬ沈丁の雨音もなく

54・3・0

啓執や旅誘ひの友便り家族旅行 土柱 阿波池田

54・3・0

花の下城址碑ひそと休暇村

54・4・0

さぬき白鳥黒川温泉に糸島さん 増田さんの案内で

山の温泉は音なく春蚊早出でし

54・4・20

文友会西国三十三ヶ所巡拝 長谷寺にて

草餅に門前町の賑へる

54・6・0

高田さんに教えられ三年前栗を土に埋めた。何本か芽お出した中の一本がすすくすすくと伸びた。五十七年相川を去る時捨てていくのが惜しかった

実生栗初花咲けり吾も健

54・6・0

冷奴遠き旅より帰り酌む

54・6・0

小森田さんと上田城より別所温泉への旅

落ちるまま実梅の匂ひ城のみち

54・7・16

小森田さんと郡上八幡 井波を訪ねて

城の灯のうるみ郡上の踊更く

新秋や欄間彫る町木の香り

谷底は見えずバス行く山の霧

高原の駅コスモスの色極め

文友会 西国三十三番 巡礼

結願の梵鐘ひびく峯の秋

相川の家にて

太りゆく大根今日も抜き惜しみ

実むらさき実生をたのむ土かぶせ

青木の実名知らぬ鳥も枝くぐり

新年謡の会

心地よき帯のしまりや謡ひ初め

安藤さん青山さんと淡路島 健和荘で新年を過ごす 渡船のおり

54・8・24大島醇子選

54・8・23

54・8・24

54・12・0

54・12・0

54・12・0

54・12・0

54・12・0

55・1・0

新年の交す汽笛に群れ鳴

村上ぬいさんの急逝

通夜の冷え遺作のぼら絵明るきも

出棺す白梅こぼる砂踏みて

相川の家

雨戸くる朝なあさなを露育つ

菜園の菊菜色よし久の子に

浅野繁雄さんご他界小森田さん入院

青葉して忌ごもる友と病める友

小豆島国民宿舎（池田）に集まりて

明易し潮騒近き島の宿

島の雷止みて翼船ましぐら

竹四郎病む

梅雨嵐し離れ病む子をただ祈る

55
・
1
・
1

55 55
・ ・
3 3
・ ・
0 0

55 55
・ ・
4 4
・ ・
0 0

55
・
5
・
0

55
・
6
・
0

55
・
6
・
1

55
・
6
・
0

海南林満喜子さん宅を訪ねて

見送られ見返る薄暮白あやめ

海道先生が第一位にとつてくださった

整の昼寝 私のひるね

健やかな孫の寢息やプール焼け

草引きて草の匂ひの手枕寝

あわくら温泉に幡井さんと行く店の決算をすませて

水引の紅ぬれづめに水車

みのり田の道登校のペダル踏む

温泉涼し重き一事を成しとげて

山下さんと退院した小森田さんを名古屋に訪ねて

退院の友いきいきと派手浴衣

大川一善安子さんの車で信穂高 木曾濁河温泉

ダム澄める揺れ映りいる合歓の花

露天湯の一灯淡く月見草

霊峰の碧に真向ひ秋ざくら

| | | | | | | | | |
|----|---|---|----|----|----|----|----|----|
| 55 | 双 | 双 | 55 | 55 | 55 | 55 | 55 | 55 |
| ・ | 適 | 適 | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 8 | 0 | 8 | 7 | 9 | 9 | 9 | 8 | 6 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 4 | 3 | 2 | 17 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

私の誕生祝として大台ヶ原へ一善安子さんがドライブしてくれた。紅葉が盛りの山々プロ野球日本シリーズ広島優勝のラヂをききつつ

先急ぎつつ仰ぎゆく峯紅葉

相川の住居

しみじみと語らな白菊活けて待つ

遠き旅はなやぎ帰り菊を焚く

枯菊を焚きつつしばし物思ひ

鉄橋を渡れば小駅片時雨

黄の翅の止り色増す実むらさき

天高し施肥よく効きし畑の色

七草粥

七草の数揃はねど畑の菜を

幡井さんと焼津 学保に庭からの一望焼津港

一望に漁港おさめて梅の丘

浅野房子さんを訪ねて近くの温泉で一夜を

春炬燵尽きぬ話の果は伏し

55
・
11
・
2

55
・
12
・
0

55
・
12
・
0

55
・
12
・
0

55
・
12
・
0

55
・
11
・
0

55
・
11
・
0

56
・
1
・
0

56
・
1
・
30

56
・
3
・
0

春の冷え別れて一人立つ小駅

56
・
3
・
0

安子さんが井高野の手伝いを止めることについて一善の言い方処置に納得が出来ない
筋の通らないことに妥協出
来ない私の性

争ひてふと空しかり梅の闇

56
・
3
・
0

飯田知子短大入学祝い

合格の祝袋は字も太く

56
・
3
・
0

相川家

摘みし露独りの厨たのしかり

56
・
4
・
0

散る桜庭の胸像ただ黙し

56
・
4
・
0

武具飾る子は父となり遠くあり

56
・
4
・
0

真鍋先生の鮎のこと 市原さんのご主人の釣りのこと

解禁の夕べたまはる吉野鮎

56
・
5
・
0

釣りし鮎川に戻して春の風

56
・
5
・
0

上京車中

富士聳ゆ裾野の町の鯉のぼり

養老の滝へ

滝水をコップに汲みて喉しまる

相川地藏まつり

御詠歌の流れへいそぐ地藏盆

児玉正志さん急の来客

枝豆に酌みて不意なる遠き客

市原さんご夫妻の釣り

釣る夫の片辺に妻の秋日傘

高松高女のクラス会 萩 津和野

武家屋敷崩れ土堀に石路盛り

草子里時雨れる朝の大き虹

遂に一善があやまりに来た 貞子の五十年忌法要が近づいて

わだかまり解けて減りゆく盛みかん

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 56 | 56 | 56 | 56 | 56 | 56 | 56 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 10 | 10 | 10 | 10 | 9 | 8 | 0 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 24 | 22 | 0 | 0 | 0 | 0 |

相川の岩橋家近くの火事のあと

売地札草にかくれて秋暮るる

相川の家 私の誕生日

栗おこわ我が誕生は頃もよく

霜よけにレタス生々玉巻ける

供華の菊剪りためらひぬ眠り蝶

落葉炊く煙の中に思ふこと

新らしく菊きり供え旅に出る

鎌倉 お寺の名前を忘れたが

踏み惜しみつつ鎌倉の銀杏黄葉

師走の姿

ウインドに背まるく映る師走町

直紀 年末相川にきて手伝ってくれる

晦日そば孫の食べざま頼もしく

56
・
12
・
0

56
・
12
・
0

56
・
11
・
24

56 56
・ ・
11 11
・ ・
0 0

56 56 56
・ ・ ・
11 11 11
・ ・ ・
0 0 0

56
・
11
・
0

56
・
11
・
0

上京 成城の家

窓の梅ほころびゆくをみるしじま

散り梅のかかり濯ぎのもの乾く

八百様を訪ねて

春遠しこもれる叔母に京の菓子

海南の林さん受験（阪大）で泊まる

受験生泊めて祈りを同心に

相川の橋より

日脚伸ぶ中洲に群れる鳥の白

露の臺焼みその香の朝厨

仲塚の案内 垂水神社

散る花の流れゆくあり踏まるあり

郷生と小田原城

天主より振る手呼ぶ声花の中

相川の畑の垣越し中島さんのお嬢さん

57
・
4
・
057
・
4
・
057 57
・ ・
3 3
・ ・
0 057
・
3
・
057
・
2
・
057 57
・ ・
2 2
・ ・
0 0

葱坊主垣越しの子はよくしゃべる
耳遠く笑顔で応ふ木の芽雨

57 57
・ 5
・ 0

一善 安子さんと早発して青山高原にドライブそれは伊賀上野方面への再ドライブだったその数日前 室生寺に之も早朝出かけてたぐさんの写真を撮ったつもりが、カメラはフィルムが入っていないかった。わざわざ伊賀上野百合子宅まで訪れたのに 室生寺門前で草餅を買う 時間はまだまだ昼前 大野寺で昼弁当をいただき相談は急に伊賀上野へ

草餅にふと道変へて娘に急ぐ

57
・ 5
・ 0

小汐さん 増田さん 伊藤さんあわくら荘より鳥取砂丘 磨? 寺へ

直ぐ消ゆる足跡砂に五月旅

57
・ 5
・ 0

風光る砂丘を踏めば若返る

57
・ 5
・ 0

石段のあえぎに著莪の花やさし

57
・ 5
・ 0

岐阜羽島へ行ったとき

単線の停車は長し青田風

57
・ 6
・ 0

思い出湖畔の旅

花栗の香に堂守の鍵開く

57
・ 7
・ 0

老鶯や堂守力こめて説く

57
・ 7
・ 0

北海道旅行

知床の大雪溪に昼の月

雪溪を映し知床五湖寂と

えぞかんぞう岬はるか異国なる

昆布乾すさいはての島明易し

獅子独活の花眼の限り・

成城の家 笹倉の庭に鷺草が

鷺草の鷺二羽となる娘に甘え

相川の最後の夏

魂迎ふ一人となりて古家守る

手ごなしで土をかぶせる秋の種

十指もて土をかぶせる秋の種

豪雷にいさかふ妹弟抱き合ふ

亡娘ノート紙魚^{しみ}生きている悲しさよ

秋立ちぬ束ねてさせり亡母の櫛

晚菊の咲くや明日より他人の庭

引き越しの荷隅にかばふ冬すみれ

双
適
57
・
7
・
0

57 57 57 57 57
・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0
・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0

57
・
8
・
0

57 57 57 57 57 57 57
・ ・ ・ ・ ・
10 10 9 9 8 8 8
・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0 0 0

秋
そ
ろ
引
越
荷
物
嵩
む
部
屋

57
・
10
・
0

第3章 水無瀬

水無瀬に移り来て

秋風も他人もやさし移り住み

見捨てかね新居に挿せり倒れ菊

幡井さんと山代温泉国家公務員保養所

寛ぎて見る山荘の紅葉濃し

水無瀬相川通勤 相川の駅のホーム

乗りおくれくやしき顔に冬の月

水無瀬の日々

寒椿にぶる起ち居のすべもなく

友呼ばむ一人に余る日向ぼこ

| | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|
| 57 | 57 | 57 | 57 | 57 | 57 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 12 | 12 | 11 | 11 | 11 | 11 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

相川の庭

転宅の迫りし庭の実むらさき
移り住む名残の菊香衰えず

伊勢への旅の時を思い出して

玉砂利に歩の乱れなし神の留守

喜美子 聖子にはなさんと

大役の初旅富士が雲間より

日野百草園にて

梅日和白壁光る村一望

水無瀬

しつけとる春立つ朝の装ひに
水ぬるむ就職決り紅さす娘
桜餅娘の訪ひくれし小半日
目口なき紙の雛や掌になじむ

高田さん弔問

裏の家の雨に堪へ咲く八重桜

| | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 57 | 57 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 4 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 1 | 12 | 10 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 |

友の情雨に摘みきしわらび飯
忌に集るしのぶ日がなを花の雨

水無瀬楠公通の大楠像が学校庭に移し植え

除り去らる囀り包む街の樹が

読むも憂し眺むも憂しや花の雨

集ればお国訛よよもぎ餅

秩父路 高松高女の皆さんと

秩父路につづく芽桑の夕映えて

一善と一言神社へ

万緑や一言神に願一つ

田植機の若者帽子に赤い花

文友会 東北の旅

桜桃たわわの国へ喜寿の旅

西川さん 水無瀬に迎えて

杖たよる友出迎へに梅雨はげし

| | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 6 | 5 | 5 | 5 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 11 | 0 | 0 | 21 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 |

朝涼し咲きつぐ花を供華日記

引き越して來たる浜木綿咲き安堵

娘三人訪ひくれ風鈴よく鳴れり

一族の年長となり魂まつる

阪急32番街 皆美にて、竹四郎 喜美子と食事

動かぬ灯動く灯一望盆の果

洗ひ髪立つベランダの風は秋

山下さん 高田さん 駒ヶ根車山ペンシンググリーンスポット巡り」

蕎麦三日食べてさわか信濃旅

安藤さんと三方五湖

色鳥や岳に真向ふ湖の宿

大きな湖上を舞ひて夏去れり

箕面観光ホテル別館 桂 謡に会

庭紅葉もえて謡に力声

謡ひ果て山莊黄葉をのこし暮る

58
.
0
.
0

58
.
0
.
0

58
.
0
.
0

58
.
8
.
0

58
.
8
.
0

58
.
8
.
0

58
.
9
.
4

58
.
9
.
0

58
.
9
.
0

$$\begin{array}{r} 58 \\ \cdot \\ 11 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

58
.
11
.
0

水無瀬折々

翅やすむ蝶もむらさき式部の実
独り居のよき日淋し日菊挿して
疎く住み安けき日々や杜鵑草

成城の金魚

屑金魚育ち掬ひし児も少年

伊藤さん八田さん清川さん 京都の紅葉案内

案内三日京の紅葉に酔ひ疲る

照紅葉京一望の峯の寺

高田さん宅に小森田さん 小田さんと 山荘和周庵 落成

山荘の集ひに菜飯冬ぬくし

冬入日竹叢透し荘なごむ

水無瀬元旦

一とせを会ひ得ぬ人の賀状増し
しきたりをつづけて独り屠蘇機嫌

| | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 59 | 59 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 1 | 1 | 12 | 12 | 11 | 11 | 11 | 1 | 11 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 1 | 9 | 9 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

安藤さんと三方五湖へ北陸線

トンネルを抜ける度雪深くなり

水無瀬のシンビジュームがさく

ただいまと灯せば応ふ室の花

水無瀬に石井晴美さんを迎え？　る枝の友

ちゃん呼びで遠き日戻る木の葉髪

富田の駅で乗り換えの時　相川の古いお客様と出会う

春寒やぱったり出会ひ出ぬ名前

直紀　郷生　一善に質問されて

争ひも夢よ首塚土筆の芽

防府　藤本悦子さん宅　（藤本様とはこれが最後の出会いになる）

老夫婦夜をぼつぼつとひなあられ

山下さんと湯布院　亀の井　別荘二泊

雪解風由布岳さして大鴉

59
・
1
・
2

59
・
2
・
0

59
・
2
・
0

59
・
2
・
0

59
・
3
・
0

59
・
3
・
3

59
・
3
・
5

水無瀬折々

土を割る花芽それぞれ色ありて

によきによきと花芽ラツシユの庭の土

花苺兎にしやがみ見す芯の粒

朝毎の独りに足りる庭苺

団地住みテレビの上の兜の威

ホース先そらせばそこも青蛙

水無瀬の庭の青蛙はなつかしい
お隣佐藤さんに嬰誕生

花南天隣初嬰の襁褓干す

待ちつつも一人を涼しと思ふ日も

庭茂り払ふ枝にもある生命

孫の名をとりちがえ呼ぶ盆家族

夏萩に誰みくじ結ふ禁よそに

悦子さん宅へ弔問

忌ごもりの友訪ひて汨つ戻り梅雨

山下さん 小森田さん と小海線から草津野友湖

夏書終へ東塔西塔仰ぐ朝

空と無の多き夏書や朝鴉

りんどうや標高識のたつ小駅

高原列車おそしとゆれる花すすき

紫の小波たてり松虫草

思はざる遠富士すゝきの小窓より

満藤さん宅 のうぜん花

朝風に彩をひろげてのうぜん花

上野城 百合子出品を見に行く

風涼し天主の床の黒光り

俳聖殿忍者屋敷も蟬しぐれ

道成寺「白浜三段壁

秋涼し絵とき説法に笑ひあり

水軍の洞の跡や秋の潮

水無瀬盆踊り

青い眼の手ぶりに見入る踊の輪

| | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 59 | 59 | 59 | 59 | 59 | 59 | 59 | 59 | 59 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 8 | 9 | 9 | 8 | 8 | 9 | 9 | 9 | 9 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 19 | 19 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

諷刺歌踊りの櫓は高調し
送り火やもとの一人に戻る夜

直紀の成人に感じたこと

歸省子の言葉大人ひふと淋し
 若者となるは別れか鳥雲に

箱根？
保にて

夏霧の湧きて流れて山の湖

小川先生宅の山茶花

山茶花の垣咲き始めぬ謡声

吉川三郎さんを高槻の病院に見舞う

冬の雲まこと知らせぬ人見舞ふ

水無瀬年忘れ

年忘れ流す憂さなきワインの香
賀状書く亡母の字に似る母の年令
寄せ鍋の沸々はすむ故郷ことば

$$\begin{array}{r} 59 \\ \cdot \\ 8 \\ \cdot \\ 0 \end{array} \quad \begin{array}{r} 59 \\ \cdot \\ 8 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

| | |
|----|----|
| 59 | 59 |
| . | . |
| 8 | 8 |
| . | . |
| 0 | 0 |

59
.
7
.
0

59
.
11
.
0

59
.
11
.
0

$$\begin{array}{ccc} 59 & 59 & 59 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 12 & 12 & 12 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 \end{array}$$

するつと食ぶ熟柿に郷愁そぞろ湧く

私の誕生日 水無瀬

吾が誕生秋刀魚で祝ひ心足る

成城の新年

初富士や大東京の隅に住み

大阪への帰途

林立の煙突富士に初煙

初仕事裾野の町の白煙

水無瀬

移し植え三年の梅に初つぼみ

陽を集め日毎ふくらむ木瓜の花

蘭匂ふ独りの部屋に惜しき程

小田様のお嬢さま御他界 弔問

逆縁の香たく背なに春空し

水無瀬

59
・
12
・
0

59
・
11
・
0

60
・
1
・
0

60 60
・ ・
1 1
・ ・
0 0

60
・
2
・
0

60 60 60
・ ・ ・
3 2 2
・ ・ ・
0 0 0

60
・
2
・
0

春や憂し着かえし裾の静電気
 割れ込まれ句心とぎれぬ春炬燵
 初蕨(わらび)雨に持ちくれ留守の扉に
 名にひかれ植え初花をひめ辛夷

伊藤さん 清川さん と岩国城

天主より眺むる花の城下町
 階高し一打の鐘に花の散る

小汐さん 伊藤さん 清川さんと鳳来寺
 老鶯に耳あそばせて喜寿の足

三日月

蝸牛わがもの顔に城跡の碑

あわくら荘に集まりての帰り道 あわくら溪谷

ぶちぶちと峠に摘めり夏わらび

木苺の酔っぱ甘さや溪流に

水無瀬 庭に年々の青蛙

塗りかへて狭庭の客に青蛙

| | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 60 | 60 | 60 | 60 | 60 | 60 | 60 | 60 | 60 | 60 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 5 | 6 | 6 | 5 | 5 | 4 | 4 | 3 | 4 | 4 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 17 | 18 | 8 | 9 | 21 | 21 | 0 | 0 | 0 |

成城の家より駅に出る道

花ざくろ・

小田澄子さん逝く。小田さんからいただいた紫式部

御名のごと清らに生きて蓮花

たまはりし紫式部さわ咲けど

短夜や句机ならぶ夢の切れ

水無瀬

夜濯ぎて一日終りぬ恙なく

働けることの幸玉の汗

言ふだけで気のすむ愚痴に団扇風

階暑し団地こつこつセールスマン

60年双適出句

梅雨しめる記帳簿將軍旧居訪ひ

苔の花將軍愛馬の小さき塚

60
.
6
.
0

| | | |
|----|----|----|
| 60 | 60 | 60 |
| . | . | . |
| 8 | 8 | 6 |
| . | . | . |
| 0 | 0 | 0 |

60
.
8
.
0

60
.
8
.
0

60
.
8
.
0

60
.
8
.
0

60
.
9
.
0

| | |
|----|----|
| 60 | 60 |
| . | . |
| 6 | 6 |
| . | . |
| 25 | 25 |

將軍旧居もちの花
意を通し過ぎし淋しさ夏の蝶

小森田さんと山中温泉 和倉に

小駅の時計おそしと思ふ時雨来て

一駅まちがえて芦原温泉にて下車

名もゆかしこほろぎ橋の溪紅葉

冬の雷一発のみや・

高田さん見舞い

冬ぬくし見舞ひし友にもてなされ

小川先生宅

謡声白山茶花の垣流れ

落ち葉を眺めて

小説の終りのごとく落葉散る

熱海伊豆山神社にて

入選
60・60
・6
0・
・25
0

60・
11・
19

60・
11・
20

60・
11・
20

60・
12・
0

60・
12・
0

60・
12・
0

愛語りし腰掛石や昼ちちろ

曼荼羅に政子のむかし秋そぞろ

露けて墨のうすれしいわれ書

水無瀬正月風景

輪飾りの小さきをかけ団地の扉

寒木瓜の紅を深めて雨上る

盆梅や鉢の木謡ひたき夜なり

成人の日の背広着し子を見上ぐ

試験子の窓に憂きほど春深雪

弔ひて無口の帰り春吹雪

ことなげに抜歯をされて春寒し

白梅や三百年を語る幹

60
・
11
・
0

60
・
11
・
0

60
・
11
・
0

61
・
1
・
0

61
・
1
・
0

61
・
1
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

ゆずり合ひつゝ、空うばひ梅盛る

春時雨急げば合はす鍵の鈴

土を割る花芽それぞれ色ありて

書き終えてほつと紅茶の浅き春

庭隅に鈴蘭匂ひ旅ごころ

屋根草もうすき緑に御寺春

枝うつるりす生き生きと新樹光

散るものは散らして

扇塚の春

明日に咲く牡丹見よと泊めくれし

牡丹の今開かむと息づかひ

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

身も心青く染まりぬ宮若葉

山越ゆるあの辺野崎か花曇

バスの窓遠見を塞ぐ栗の花

蛇の衣板一枚の城跡文

アイスクリーム売の熱弁落城譜

蔦青し城見ゆ坂のオランダ塀

青葉冷え天主の跡の落城譜

踊太鼓すぐそこにきき足を病む

山男めきひげ面の帰省孫

癒ゆること信じてきけり蟬の声

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

癒ゆきざししかと涼しき今朝の風

亡母の櫛ふとさしてみる盆支度

杖に頼る試歩の足もと萩こぼる

寝団扇うちわにうちわどころの故郷のこと

去ぬ燕便りとたよりすれちがひ

鰯雲交しておかむ生き形見

風に雲に秋の深みを知る夕べ

カタカナ語事典にいどむ老夜長

菊の香や来し方遠し五・

雲を割り冬陽美し退職す

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

61
.
0
.
0

むなしさも煙としたり菊を焚く

年用意心のこもる故郷の荷

満目の紅葉それぞれがふ色

静かなりいで湯娘と在り去年今年

たまさかの晴着に帯と初芝居

シテ謡ひ修めし安堵室の梅

誰が為と笑はれもして初鏡

梅白し陽ざしの居間の笑ひ声

男子校女子校つづき芽ふく道

庭の陽を占めて寒木瓜紅の濃し

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

61
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

火廼要慎祀符の墨字に春ぼこり

今日は憂し今日は美くし木の芽雨

春愁を恥じて陶狸の腹を撫ず

名桜につきぬ名残の里を去る

山裾の梨の花園に白昼夢

花クローバ終の棲家の地鎮祭

松の花傘寿を集ふ公の庭

文学館出でてまぶしき若葉光

目礼がことばよ通院路の茂り

青葉雨千人塚の匂ひ濃し

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

63
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

文学碑たてる峠に秋の富士

花すゝき駅近かそうで遠かりし

招くごとコスモス揺るる無人駅

誰も来ずくつろぐ時の菊日和

老夜長旅に集めし箸袋

とっておきのワインもてなす良夜かな

南洲を語る白髪月の部屋

紅葉濃し峠二つを越えし温泉

隣より争ひ声や秋の暮

石路さかり先は稲荷の鳥居徑

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

62
.
0
.
0

海知らぬ犬を毎朝冬の浜

新らしき木の香の中に賀状書く

看とりつつ句帳かた辺に長き夜

看とり女にある秋晴や特選句

祭太鼓看とりの窓に遠くきく

安眠なき看とりの夜々に虫親し

愛語りし腰掛石や昼ちちろ

露けしや墨のうすれしいわれ書

曼荼羅に政子の昔秋そぞろ

寒青空娘は頬染めて婚約を

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

62
・
0
・
0

63
・
0
・
0

梅二月婚約成りし娘のまぶし

婚近き娘と春いちご分ちあい

列車徐行深雪のここに友住ふ

たまわりし手造り味噌に露のとう

枯芝にねてにらまるゝはらみ猫

春寒や三日もつづく探しもの

春灯失せものこゝに出て笑ふ

椿落つ今日も名知らぬ鳥の来て

ゆかし名ばかり揃えて盆梅展

春潮に水尾ひく連絡船（ふね）のあと幾日

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

終航の間近かき名残瀬戸の春

花菜漬土産に訪ひくれ京言葉

手染めとて淡き春着の京言葉

花冷えて鬼女の棲みける巨き岩

恐ろしき昔語りや花の里

杉古りて黒塚ひそと花曇る

若やぎて傘寿の集ひ牡丹園

声低く僧が餅売る牡丹寺

手をとりにて笑む道祖神若葉光

花の雨眠る山湖を去りがたく

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

老鶯や奥へとたずね政子墓所

旧姓で呼びあふ荘の明易し鎌倉荘)

まぐなぎを払ひ百体地藏訪ふ

探ねゆく流れ涼しき溪いで湯（太閤の湯）

カンナ燃えひしめきあえる養鶏舎

雲走り峯にこま草這ひて咲く

浜木綿にしばらくのこる夕茜

故里の植田にうつす己が影

錦飾る故郷ならずも茄子の花

甚平着て今日も碁敵待つ

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

63
.
0
.
0

叔父跡地ひまわり咲かす家五軒

朝顔や一家は北に赴任して

秋蝶が惜しむ別れの前よぎる

見送りの垣根アベリア咲きこぼる

滝二つ遠見の台に小手かざし

穂すすきのみるみる刈られゆく売地

吾が暮し覗いて聞いて青芒

秋と思ふホームに目立つ黒い靴

爽かや事終へて発つ旅の朝

大秋晴善光寺平一望に

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

63
・
0
・
0

歌声をのせて寄せ来る芒波

コスモスのゆれる川沿ひ遊歩道

母となる娘に寄す思ひ冬ぬくし

実南天紅し娘は母となる

水無瀬をたたむ決心

晚菊や終止符打たん独り住み

息子と同居決めむ独りの湯豆腐鍋

武生に仏壇を見に行く

トンネルを出て越前の雪景色

仏壇を買ひに越路へ雪清し

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 63 | 63 | 63 | 63 | 63 | 63 | 63 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 12 | 12 | 11 | 11 | 0 | 0 | 0 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

第4章 平成

山ふところに香煙みちて初薬師

初護摩の煙いただき肩かるし

紅梅のふふみしことも友へ書く

大茶盛廻す茶碗に和気あふれ

寒木瓜の紅流れそう雨つづく

春寒し故なく心のとがる今日

契約のとれてマフラー忘れ去ぬ

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

雪ごもり写経の日々と紙便り

春風や繰り上げ帰国のよき知らせ

引き越しの迫り咲きつぐ春の彩

転宅の別れの集ひ鱈すし

すましたる貴婦人めける柴木蓮

昼顔や島にたづねる古き墓

夕明りのこる卯波や島に泊つ

城下町一望にほふ栗の花

お天主へ石垣高し松の花

天主閣仰ぐ茶店の藤こぼる

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

紫陽花の彩拵げゆく遊歩道

1
・
0
・
0

夏三つ葉雨の小やみに摘む留守居

1
・
0
・
0

母も娘もショートカットにさくらんぼ

1
・
0
・
0

窓開き大向日葵に見つめらる

1
・
0
・
0

驕りても向日葵は好き美しくしき

1
・
0
・
0

留守居して一人に惜しき風涼し

1
・
0
・
0

水撒きて陶狸うれしき顔となる

1
・
0
・
0

思ひきり水撒き散らす重きもの

1
・
0
・
0

賞め言葉裏に返さず花クローバ

1
・
0
・
0

水撒きて木々と話をする留守居

1
・
0
・
0

白粉花空家となりし垣に満つ

病葉のこの量踏みて医に通ふ

鳶舞ふ高野の夏の深き空

野猿乗り夏の河原の若者等

グラデオラス店の娘明るく迎へくれ

ボンボンダリヤ活けて村営コーヒー館

漁火に想ひそれぞれ宿浴衣

盆列車着席までを送らるる

伝説の湖ははるかに芒原

湖も山もみるみる消えて霧の海

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

山の霧流れて速し湖生る

のぼり来て賽の河原の細芒

旅に訪ふドラマ舞台の町も秋

久の出会い杖目じるしと言ふも秋

秋釣の成果に夕餉賑へり

秋雨のやまず留守居の夕仕度

コスモスの身丈を埋めてはるか富士

湧き水の秋澄む池に富士の影

天高し誕生釈迦の細き指

落葉かき風に根気の作務の僧

$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

柿届く家なき故郷の友も老ひ

郷言葉の電話果なし老夜長

命延ぶ泉いただき峯を越す

野仏の膝にさい銭紅葉散る

冬濤の音きゝ紀伊の朝茶粥

娘が立てし枕屏風に安眠して

晚菊に名残水やり旅に出る

報恩講善女となりてしる粉賜ぶ

花車たがへず来たり年用意

心ゆくまで謡ひけり年忘れ

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

1
・
0
・
0

娘の忌日となりて年経る小つもごり

旅立ちを止めて眺むる強吹雪

おくれ咲く紅山茶花の雪化粧

潮の香をはこび来る風春近し

水溫みあひる天国てふ川辺

指圧効きかろき足もと露のとう

桃ふふみ声出し笑ふと嬰便り

初雛に招かれ・

亡母の忌や弟としてのぶ春炬燵

高々と辛夷咲きみつ城跡園

$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

もてなさる小さき土鍋に土筆煮て

こんがりと焼味噌落のとうほのと

落摘みて老の自慢のちらしずし

一心の白夕闇にほのと浮く

陶狸の背出で入る鳥の巣づくりか

葉桜や友のギブスはまだ除れず

露座観音見おろす里の柿若葉

柿若葉光る白壁つづく里

風薫る河童出そうな筑後川

老鶯に迎えられけり峡の宿

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

鱧一尾釣りて得意の帰宅ベル

2
・
0
・
0

釣りし鱧ほめて一箸つつ廻し

2
・
0
・
0

ご協力と酔い甘夏を嫁出し来

2
・
0
・
0

紫陽花や登山電車は幾曲がり

2
・
0
・
0

お世辞とも思ひつつ買ふ夏帽子

2
・
0
・
0

夏帽子鏡の顔はヤヤすまし

2
・
0
・
0

のびて寝る猫のかたへに端居して

2
・
0
・
0

待つ荷物おそし木樺はしほみ初む

2
・
0
・
0

鎌倉の御寺涼やか友葬る

2
・
0
・
0

母として慕はれ甥とビールくむ

2
・
0
・
0

風鈴や父母知らぬ甥よき父に

五・

巨寺にみちのくらしき萩まつり

雨上がり紅たわゝなるりんご園

子に孫にりんご送りて津軽旅

台風もよしといで湯にやり過ごし

久に來し皇居のお濠曼珠沙華

コスモスの風に流せるほどの些事

ただ声をききたく夜長の遠電話

バスを待つこわれベンチに秋の蝶

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

2
・
0
・
0

茫々の芒の中や美人塚

神在月とガイド熱あり出雲路よ

濃紅葉座禪堂の扉はかたく閉じ

寄進瓦に筆持つひまも紅葉散る

庭小春鳩来て犬が少し吠え

晩菊や顔見ぬ電話言ひ過ぎし

枯木してはるか富士見る道となる

数の子の歯音うれしや八・

初詣極楽寺てふ名にひかれ

初旅や全き富士に真向へり

$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

2
.
0
.
0

2
.
0
.
0

$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 3 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 3 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 3 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

立春の陽に勇氣湧きトレーニング

足鍛え眠り覚めたる山のぼる

人波に流されてみる梅まつり

指呼の山みるみるかくす春吹雪

舞へ狂へいで湯ごもりの春吹雪

ほの酔ひや孫つぎくれしお白酒

ひなの前老も交りて撮る今宵

梅林へ少しの坂も手を引かれ

白梅の古木に希ふ吾が余生

湖見ゆる観音堂の大桜

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

芽柳の日々に大ゆれ風青し

3
・
0
・
0

花散るや石州瓦の光る村

3
・
0
・
0

初蝶や癒えて佇つ庭彩ふえて

3
・
0
・
0

初蝶やふつり切れし思ひごと

3
・
0
・
0

新茶賜ぶ少年今は病院長

3
・
0
・
0

芍薬や三度の転居共にして

3
・
0
・
0

染め止めて白髪軽し青葉風

3
・
0
・
0

年令らしく白髪でおしゃれ夏帽子

3
・
0
・
0

釣り土産べらとはうれし瀬戸育ち

3
・
0
・
0

早苗田の日毎濃くなる療の窓

3
・
0
・
0

山の湖万緑の中遠くあり

山間の夏霧深き駅に着く

立葵彩を揃えて山の駅

薬草湯の香りのこりて宿浴衣

大寸の宿衣たぐりて岩魚膳

億の土地我がもの顔に青すすき

通院の道は川沿ひ月見草

時計おそし独り留守居の小粒ぶどう

秋暑しビルの掃除夫見上ぐ窓

保養所のヴェランダ踊りの列を見る

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

踊りうちわよべの土産と保養友

秋の湖哀話流して遊覧船

温泉の町にお湯かけ地藏秋うらら

敬老日ほの酔はされて若返る

誰が家ぞ芒刈られて地鎮祭

秋場所の終り落ちつき夕支度

ゆかしさに秋七草の寺巡り

尊氏も正成も美男菊衣

天高し八・

穂芒の波うねうねと芒山

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

秋茄子を嫁にすすめて共笑ひ

神有りの出雲の湖はかもめ舞ふ

穴道湖の大橋たもと柳散る

穴道湖の秋の入日に出会ひけり

名菓舗の近くに石焼芋の声

鳴き砂を踏めば聞えし秋の声

白髪を少しのぞかせ冬帽子

もう一度鏡をのぞく冬帽子

久に会ふ少しおしやれに冬帽子

諦めもした犬癒えて冬ぬくし

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

3
・
0
・
0

独言ならずチロとの話始め

3
・
0
・
0

愛犬のチロも淑氣の尾をふれり

4
・
0
・
0

年の夜吾より古き茶棚拭く

3
・
0
・
0

立春大吉吾より古き茶棚拭く

3
・
0
・
0

名水へ凍ての溪路手をひかれ

4
・
0
・
0

謡初帶山小さく装ふ同志

4
・
0
・
0

謡初足のねぢりを許し合ひ

4
・
0
・
0

保養所で看る東京の雪ニユース

4
・
0
・
0

お返しを気にする老や冬いちご

4
・
0
・
0

大山ははるか田に群る白鳥かな

4
・
0
・
0

旅帰り待ちくれ紅梅咲き満つる

紅梅や吾が色にせむと言ひし亡友

梅の闇逢ふ日約せし友逝きぬ

旅はずむ卒業進学祝ぎ二つ

たまさかの母と息子の旅春の虹

春眠の・

春セーター鏡に肩のうすきこと

美しく老いたきものよ柴木蓮

シクラメン茶の間笑ひ溢れさす

ふる里はすみれたんぽ墓の径

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

桃の花さら前かけの辻地藏

4
・
0
・
0

お遍路の憩なる礎石大伽藍

4
・
0
・
0

菜の花を手いつぱい摘み日毎漬け

4
・
0
・
0

日々摘めど菜の花畑の黄は濃ゆく

4
・
0
・
0

花杏真白従妹に甘え気味

4
・
0
・
0

芍薬の蕾ふくらむ庭の日々

4
・
0
・
0

発つ朝にうす紅ほのと花水木

4
・
0
・
0

いそいそと半袖えらび旅立てり

4
・
0
・
0

山迫る車窓次々藤の花

4
・
0
・
0

若葉風亡妹の友とめぐり逢ひ

4
・
0
・
0

短か夜や亡妹の友と泊つ出雲

ビール酌むかちんとグラス若やぎて

ビール酌むドラマのように共鳴し

ビール乾し少し多弁に刻忘る

向日葵が君臨空地の草いくさ

木樺咲く一日の花の教えごと

垣根ばら互の無事を老犬と

夕仕度水の出細き大暑かな

開け放つ窓に早起き木樺かな

酌みもして媚の気配り涼しき餉

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

倒産の去りゆく一家百日紅

一言がちくりと秋の草に棘

遠富士の景ある売地草茂る

芝生踏む素足に伝ふ今朝の秋

新涼や試歩の芝生に笑み交す

高階に寝て眺め居り雲の峰

霧にまだ眠る町並試歩はげむ

夏霧の深し湯の町まだ覚めず

回廊に沿ふ白萩に清めらる

水攻めの城跡や蓮の実の大粒

$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

苗木より三年無花果三つ熟れる

長生きに想ひいろいろ敬老日

秋灯下親しきものは虫眼鏡

保養所の昼餉にぎやか大秋刀魚

露芝生試歩の目標果し得て

秋日和木椅子に一病話し合ふ

シャッターを頼む一会や寺紅葉

庭園灯淡きに和せぬ木屋の香

実梅の香まこと顔して嘘をきく

夜の仏間大蜘蛛打ちて逃がしけり

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

耳遠く独りもよしと新茶汲む

4
・
0
・
0

魂迎ふやがては迎えらるる吾

4
・
0
・
0

帰省子に一夜越し方きかれけり

4
・
0
・
0

山莊の富士見ゆ窓に姫りんご

4
・
0
・
0

夜霧匂ふ同郷なりし莊の主

4
・
0
・
0

天高し無傷の紺を飛機が割る

4
・
0
・
0

セーターの赤を鏡に問ふ八・

4
・
0
・
0

声高や桜紅葉の女子校道

4
・
0
・
0

迎えられ娘の柚子風呂の香りかな

4
・
0
・
0

いさかひが笑ひに母と娘の冬至

4
・
0
・
0

年用意母と娘の声いづれとも

部屋に冷ゆ胸像の夫に独り言

行く年へ刻む時計に息つめて

我が城と正月飾り四畳半

繰るほどに夢ふくらみ来初暦

二日早帰る子送る母の背

好物で老犬はげます寒の入

居候の老に朝毎寒玉子

老犬と共に留守居す梅日和

老犬の背に紅梅の一片が

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

4
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

一跳ねに広がる水輪水ぬるむ

5
・
0
・
0

春立ちぬ川面は白き雲浮かべ

5
・
0
・
0

白き雲浮かべ川面は春立ちぬ

5
・
0
・
0

倅せは菌音にありし年の豆

5
・
0
・
0

今日よりはチロ居ぬ生活春寒し

5
・
0
・
0

姫こぶし一輪樹下にチロは死す

5
・
0
・
0

春風おさまる朝にチロは死す

5
・
0
・
0

春寒しピンクの布に巻く屍

5
・
0
・
0

窓開けばおやつ待つチロ無き余寒

5
・
0
・
0

従姉妹どち幼な呼びして桃の郷

5
・
0
・
0

故里や摘みてたちまち木の芽和え

故里はお遍路の鈴あわあわと

朧夜や骨までしゃぶる瀬戸の味

短夜やはらから集ふ郷言葉

老鶯に迎え送られ札所寺

仁王門くぐりて見上ぐ余花やさし

牡丹や余生つぎこむ花づくり

新背広卒業の子を見上げけり

祝背広就職といふ巣立かな

就職は別れの一つ鳥雲に

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

散華とも霊園しとど花吹雪

5
・
0
・
0

咲き競ひし源平桃も葉となりぬ

5
・
0
・
0

藤娘出そう藤房ととのへり

5
・
0
・
0

三代の旅信濃路を青葉風

5
・
0
・
0

大手まり真白湯の香の中にゆれ

5
・
0
・
0

まじり気のなきみどり嶺よ露天風呂

5
・
0
・
0

峯八分疲れは軽し藤の花

5
・
0
・
0

からみ合ひ花房乱る深山藤

5
・
0
・
0

子に植えし桜桃熟るる少女有美

5
・
0
・
0

遍路憩ふ礎石千年語りつぐ

5
・
0
・
0

点滴の紫班をさする梅雨の窓

明易すや退院といふ別れかな

濃紫陽花点滴の染みうすれゆく

錠剤をならべ数えて夕薄暑

負け相撲少し頭痛の戻り梅雨

連れだちていそいそ母娘浴衣買ひ

連れだちて母娘の購む派手浴衣

浴衣茶会立居気になる娘を送る

月下美人迎へ車で御対面

月下美人息を弛めず咲き拡ぐ

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

手伝ひ娘不満あるげに水を打つ

5
・
0
・
0

咲きましたとて嫁が見す鷺草鉢

5
・
0
・
0

鷺草の飛びさる舞ひよう目離せず

5
・
0
・
0

水撒けば陶狸がうれし涙する

5
・
0
・
0

これはまあ皿をはみ出る初秋刀魚

5
・
0
・
0

倉裡裏の鬼灯赤し妻若し

5
・
0
・
0

猫難の子雀放つ秋彼岸

5
・
0
・
0

雀獲りしかり猫抱く秋彼岸

5
・
0
・
0

映る影流るる音も水の秋

5
・
0
・
0

秋晴やいそいそ釣に暮敵と

5
・
0
・
0

秋晴や碁敵はまた釣がたき

釣りし沙魚はねる厨にはや碁音

雁渡る双手で握手する別れ

口釜へ増ゆる孫との日向ぼこ

柿送る案内電話の郷言葉

柳散る入日に染まる湖のほとり

五指ほぐすなだむ節おし今朝の秋

夜逃げとや閉ざせる窓に満月光

人恋ふかに垣越し延び来青き蔦

猫舌は母似亡母恋ふ湯豆腐鍋

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

5
・
0
・
0

ただいまの娘の声弾む宵戎

6
.
0
.
0

初釜へ晴着見送る母も美し

はよ来ませ郷言うれし初電話

寒玉子盛りあがる黄身老もまた

春寒やもう夢でしか逢へぬ人

頑張れよ愛犬館も初日さす

受験子に買ふ知恵袋文殊さま

春寒し起ち居いちいち声あげて

中古車群旗はたはたと春を呼ぶ

猫柳活ける娘もまたつやつやし

花葉挿しふと京の友思ひけり

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

再会や土を割り出る花芽たち

分葱とおふろ味の老自慢

名もゆかし若草豆腐のうすみどり

点心に一口ほどのたらの芽よ

茄子胡瓜畑銀座と故里便り

額の花一人で居たき時もあり

夏帽子のぞく白髪も好しとして

夏帽子年齢をきかれて逆に問ひ

山梔子の真白につらき雨つづく

青葉風入れてもきれぬ愚痴話

6
.
0
.
0

$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

6
.
0
.
0

言ひたきをたたむくちなし真白なる

辻地藏朝取りトマトにお眼細く

暑に耐える白前掛の辻地藏

青田風通し一睡の浄土かな

喉走る名水冷えの心太

空暗し呼べば遠退く夕立雲

今日も亦他所夕立とそれにけり

花合歓や溪の音きく温泉の窓

含羞草いで湯泊りの老四人

故里は金比羅歌舞伎花の山

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

岐れ道ミモザ盛りの島巡り

一言の棘のいたみや夏薊

一言の棘に猛暑の雲みあぐ

風鈴や窓辺に母と娘の笑顔

昼寝覚めまだ侍り猫伸びきって

シルバーホーム笑ち会釈して廊涼し

お元気ねきれいに食べし夏料理

西瓜割漢につづく娘が果す

踊の輪みるみる三重に炭坑節

高階に眼覺めてわつと雲の峰

6
.
0
.
0

$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
6
.
0
.
0

熱帯夜慣れて別れのなになう

朝涼や肩まで掛けてふと淋し

雲の峰息子は太平洋の空ならん

満月や仰ぎし友はいま筑紫

月白やせり上り待つ大舞台

手折り来て芒挿してくれホーム友

敬老日過ぎて忘れを詫ぶ息子かな

夕木槿一日思案し言ふまじと

傷つけしことに気附かず青芒

押し分けも背伸びもなくて草の花

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

侘びて住むごと庭隅の時鳥草

住むは誰隣の芒刈られけり

息子に目立ちきし白きもの柿をむく

高階に泊つ霧ぬれの大夜景

秋灯に左傾ぎの寿百の字

ふる里や菜飯に小芋の煮ころがし

大根抜く厨に待つはおろしがね

木あがりの茄子見落さず芥子漬

木あがりの茄子と思へぬ芥子漬

そつと出る夫追ふ妻や露の烟

6
.
0
.
0

$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

6
.
0
.
0

6
.
0
.
06
.
0
.
06
.
0
.
0

医と寺の娘が幼な友木の葉髪

秋風や札所の寺の大礎石

木犀匂ふ金銀並びし故里の庭

着ぶくれて椅子のくぼみに孫自慢

ほほえみで答ふ遠耳冬すみれ

言ふだけを言ふてコートのを忘れ物

爪切りで指美しく賀状書く

保養所の握手の別れ紅葉散る

晩菊にそとさよならをししばし旅

物忘れめつきり増えて年の暮

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

晩菊の一本供花とし剪りにけり

6
・
0
・
0

補聴器を切りて一人の冬の夜

6
・
0
・
0

ほんのりと米寿の頬に屠蘇の紅

7
・
0
・
0

倅せは初夢もなき深眠り

7
・
0
・
0

住連飾りドアにかけて・

7
・
0
・
0

開かんと冬薔薇秘めし力かな

7
・
0
・
0

梅一輪いちりん日々を留守居して

7
・
0
・
0

倅せや日々の留守居に梅一輪

7
・
0
・
0

紅梅や白磁揃ひの朝餉の膳

7
・
0
・
0

話す日々米寿祝の冬ばらに

7
・
0
・
0

毛糸解く編み直されぬ過去てふもの

春寒し幼なに戻るおないどし

空地占め空の青吸ひ犬ふぐり

椀に浮くさみどりを吸い春一番

朝桜夢のあと追ふ思慕の人

聞くだけで事情を愚痴の春炬燵

躓きて掌をつくところ土筆んぼ

躓きて土筆三本折りて詫ぶ

雪柳白壁拒み闇寄せず

白壁の汚れはじらふ雪柳

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

ワインの栓ぼんに拍手や夜はおぼろ

花は葉に母の素直は息子の憂ひ

応えなく平寝落ちしよ花疲れ

落ち椿さつさと主掃きにけり

兄弟が初鯉のぼり揚げにけり

母の日に娘二人の遠電話

母の日や六・

岐れ道えらべば険し果の余花

試歩のぼす思ひたがわず藤の花

絵タイルの道若やぎて地球の日

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

高きほど大揺れてをり夾竹桃

雑草の茂りたくまし子もたくまし

草いくさ陣地広げし青芒

葉を研ぎて陣地広げむ青芒

職退くも余生と言へぬ梅青し

娘名で忌の案内状梅雨じめり

海の風山の風入れ夏座敷

夕木槿汚れなき白閉じにけり

春秋を裾にひろげて讃岐富士

はいはいと重ねてさびし含羞草

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

眠り草ねむらぬ葉あり反抗期

装ひし遠き日のあり薄衣

咲き満つもなほあわあわと花みずき

花水木乙女の恋の物語

故郷発つ朝採りトマト重すぎて

傷つけしこと気付かずや青芒

やさしくも棘ある言葉夏薊

夏痩せを知らずに生きて米寿かな

掌中の珠とはこれよ白桃むく

無花果を鳥につつかれ犬叱る

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

新涼や又取り出して読む佳信

爽やかや返書のペンのよくすべり

鳥わたる返書に三色ボールペン

露けしや二人の友の新佛

コスモスに手をふる急行待避駅

秋夕焼こつくりさんの道標

出ぬ電話そうか今宵は月の句座

家の味継ぎて伝えて祭ずし

貰ふなら遠慮はすまじ秋茄子

栗むくや消えぬ弟の国訛

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

故郷もつ倅せしかと柿をむく

7
・
0
・
0

文化の日遠き明治の今日生れ

7
・
0
・
0

透きとおる秋や少年ハーモニカ吹く

7
・
0
・
0

鰯雲告げたき人は遠く住み

7
・
0
・
0

いま倅障子をよぎる鳥の影

7
・
0
・
0

山茶花や豆腐屋を待つ留守居役

7
・
0
・
0

冬桜口紅うすくひく米寿

7
・
0
・
0

騙されてをれば事なし枯尾花

7
・
0
・
0

梅ヶ枝の終の一葉の散る別れ

7
・
0
・
0

平成八年と九年の原本を喪失した。句だけはのこっていたので_三に載せてある。

第5章 all

a

| | | | |
|-----------------|----------|----------------|----------|
| 野仏の笑ひ在せり曼珠沙華 | 19730900 | 年用意丹波男の荷は売れ早き | 19741200 |
| 日を浴びてままここの子や草紅葉 | 19731000 | 友待つに暮色刻々粉雪舞ふ | 19750100 |
| 顔見世の名残を夢に見しも去年 | 19731200 | 風ぬくき末黒野鳥群をなし | 19750200 |
| 髪結ひて寝ず娘は待つ初詣 | 19740100 | 化粧水掌に冷えのなし春隣 | 19750300 |
| 猫の恋根笹の乱れ昨日今日 | 19740200 | 綿菓子も売れて野崎の花曇 | 19750400 |
| 山の色幾重の果の雪解光 | 19740200 | 花曇年甲斐もなき物忘れ | 19750400 |
| 陵の薄陽の濠も水草生ふ | 19740300 | 若やぎて夏来る歌口ずさむ | 19750500 |
| 娘の縁談又もこわれぬ春の雪 | 19740300 | 梅雨曇出入せはしき軒雀 | 19750600 |
| 花過ぎぬいづこともなき旅心 | 19740400 | 花葵露地の家々箱咲きに | 19750600 |
| 山裾の雨に煙れる桐の花 | 19740500 | あらはなるちくり根洗ひ大夕立 | 19750700 |
| 夜神東の明りに映ゆる銀杏黄葉 | 19741100 | 看る夜の心もとなき星の飛ぶ | 19750826 |
| 野仏の顔かくすまで草の花 | 19740900 | 子等去りぬ礎石にならぶ蟬の殻 | 19750800 |
| 置炬燵向ふ人なきあで蒲団 | 19741100 | 大月夜唐招提寺の庭にゝつ | 197508 |
| | | 色鳥や朝の湖の小栈橋 | 19751000 |

| | | | |
|-----------------|----------|-----------------|----------|
| 秋惜しむほほ紅少こしさしてみむ | 19751000 | 花卉ゆれ奥より出でし虻の貌 | 19770400 |
| 新鮮と我から言ひて冬菜売 | 19751200 | 燕の子黄ならびの嘴花のごと | 19770500 |
| 独り居の朝茶の香り笹に来る | 19760100 | 木苺や山の佛の唇あせて | 19770625 |
| 家長の座に心しまりて大福茶 | 19760100 | 寝冷え子のうつろの瞳絵本散る | 19770700 |
| 新らしき命を呼びて野火勢ふ | 19760200 | 蜜豆に唇さみし嘘を言ふ | 19770700 |
| 春泥の径つき寺の小門あり | 19760300 | 湖の色北より深み秋きざす | 19770800 |
| 黄帽子水筒どの児の靴も春の泥 | 19760300 | 竹生島真向ふ宿の洗鯉 | 19770800 |
| 花の奥雨に煙れる塔のあり | 19760400 | 登るほど尾花は細し高野道 | 19770900 |
| 老鶯や御手の茶壺のかたむける | 19760517 | 行けど行けど穂芒波や夕茜 | 19770900 |
| 老鶯に唐松林行きにゆく | 19760516 | 天高し隠岐の草原牛肥えて | 19770900 |
| 湖見ゆる古戦場道落し文 | 19760700 | 雪場の鐘にも和さずけらつつき | 19771000 |
| 病妹の欲りし日とあり梨供ふ | 19760900 | 下枝より褪せて小庭の実むらさき | 19771000 |
| 鐘楼に屋根草のびて露ふかし | 19761017 | 庭雀床払ひせしふとん干す | 19771200 |
| 四つ手網死魚の乾けり秋の声 | 19761017 | 白寿祝ぐ願いをこめて羽根蒲団 | 19771200 |
| 晩菊のうつろいはじむ白きより | 19761100 | 若水や心新らたに栓開く | 19780100 |
| 晩菊やなほ美しくしき謡の師 | 19761100 | 句友の訃夜を沈丁の香のせまり | 19780300 |
| 秋冷ゆる赤きストビラ散る舗道 | 19761100 | 春潮に群れ飛ぶかもめ水尾追ひて | 19780300 |
| 綿虫の籬越え来て雨を呼ぶ | 19761100 | 門かたく喪の家ひそと花ゆすら | 19780400 |
| 蛤の潮のしたたり出船待つ | 19770305 | 潮騒の丘の花冷学徒眠る | 19780300 |
| 河原なる飛球の行方風光る | 19770300 | 城跡の古井戸涸れず苔の花 | 19780605 |
| 吉野山春蘭の店は客呼ばず | 19770405 | 桑の実に郷愁ありて札所径 | 19780600 |

| | | | |
|--------------------|----------|-----------------|----------|
| 焼香待つ黒幕裾の蟻地獄 | 19780700 | 落ちるまま実梅の匂ひ城のみち | 19790716 |
| 葉鶏頭一筋町の故郷晴れ | 19781000 | 城の灯のうるみ郡上の踊更く | 19790823 |
| 結願の杖納め得し鴟日和 | 19781000 | 新秋や欄間彫る町木の香り | 19790824 |
| 花売の残す菊の香路地の朝 | 19781200 | 谷底は見えずバス行く山の霧 | 19790824 |
| 口ませし孫の電話や冬すみれ | 19781200 | 高原の駅コスモスの色極め | 19790824 |
| 曼珠沙華島の陵人稀に | 19780900 | 結願の梵鐘ひびく峯の秋 | 19791200 |
| 出張のしげかれ疾かれ牡蠣土産 | 19781000 | 太りゆく大根今日も抜き惜しみ | 19791200 |
| 寄れば逃ぐ子に獅子舞の昂りて | 19781000 | 実むらさき実生をたのむ土かぶせ | 19791200 |
| 寒餅を切る夜のまど とろり | 19781000 | 青木の実名知らぬ鳥も枝くぐり | 19791200 |
| 旅立ちの鏡に向ふ夏帽子 | 19781000 | 心地よき帯のしまりや謡ひ初め | 19800100 |
| 久々の子に浴衣着せ今宵酌む | 19781000 | 新年の交す汽笛に群れ鳴 | 19800101 |
| 草の花名を問ひ問はれ三輪の径 | 19781000 | 通夜の冷え遺作のばら絵明るきも | 19800000 |
| 三代が屠蘇なみなみと三つの盃 | 19790100 | 出棺す白梅こぼる砂踏みて | 19800000 |
| 冬蒨や繙帯の足歩を試す | 19790100 | 雨戸くる朝なあさなを踏育つ | 19800400 |
| 昂りぬ沈丁の雨音もなく | 19790300 | 菜園の菊菜色よし久の子に | 19800400 |
| 啓執や旅誘ひの友便り | 19790300 | 青葉して忌ごもる友と病める友 | 19800500 |
| 花の下城址碑ひそと休暇村 | 19790420 | 明易し潮騒近き島の宿 | 19800531 |
| 山の温泉は音なく春蚊早出でし | 19790420 | 島の雷止みて翼船ましぐら | 19800601 |
| 草餅に門前町の賑へる | 19790600 | 梅雨嵐し離れ病む子をただ祈る | 19800600 |
| 実生栗初花咲けり吾も健 | 19790600 | 見送られ見返る薄暮白あやめ | 19800600 |
| 冷奴遠き旅より帰り酌む | 19790600 | 健やかな孫の寝息やプール焼け | 19800800 |

| | | | |
|-----------------|----------|------------------|----------|
| 草引きて草の匂ひの手枕寝 | 19800800 | 摘みし落独りの厨たのしかり | 19810400 |
| 水引の紅ぬれづめに水車 | 19800900 | 散る桜庭の胸像ただ黙し | 19810400 |
| みのり田の道登校のベダル踏む | 19800900 | 武具飾る子は父となり遠くあり | 19810500 |
| 温泉涼し重き一事を成しとげて | 19800900 | 解禁の夕べたまはる吉野鮎 | 19810500 |
| 退院の友いきいきと派手浴衣 | 19800717 | 釣りし鮎川に戻して春の風 | 19810400 |
| ダム澄める揺れ映りいる合歡の花 | 19800802 | 富士聳ゆ裾野の町の鯉のぼり | 19810500 |
| 露天湯の一灯淡く月見草 | 19800803 | 滝水をコップに汲みて喉しまる | 19810700 |
| 霊峰の碧に真向ひ秋ざくら | 19800804 | 御詠歌の流れへいそぐ地藏盆 | 19810800 |
| 先急ぎつつ仰ぎゆく峯紅葉 | 19801102 | 枝豆に酌みて不意なる遠き客 | 19810900 |
| しみじみと語らな白菊活けて待つ | 19801102 | 釣る夫の片辺に妻の秋日傘 | 19811000 |
| 遠き旅はなやぎ帰り菊を焚く | 19801102 | 武家屋敷崩れ土堀に石露盛り | 19811022 |
| 枯菊を焚きつつしばし物思ひ | 19801102 | 草子里時雨れる朝の大き虹 | 19811024 |
| 鉄橋を渡れば小駅片時雨 | 19801200 | わだかまり解けて減りゆく盛みかん | 19811000 |
| 黄の翅の止り色増す実むらさき | 19801100 | 噂消え火事場に茂る泡立草 | 19811100 |
| 天高し施肥よく効きし畑の色 | 19801100 | 売地札草にかくれて秋暮るる | 19811100 |
| 七草の数揃はねど畑の菜を | 19810100 | 栗おこわ我が誕生は頃もよく | 19811100 |
| 一望に漁港おさめて梅の丘 | 19810130 | 霜よけにレタス生々玉巻ける | 19811100 |
| 春炬燵尽きぬ話の果は伏し | 19810300 | 供華の菊剪りためらひぬ眠り蝶 | 19811100 |
| 春の冷え別れて一人立つ小駅 | 19810399 | 落葉炊く煙の中に思ふこと | 19811100 |
| 争ひてふと空しかり梅の闇 | 19810300 | 新らしく菊きり供え旅に出る | 19811100 |
| 合格の祝袋は字も太く | 19810300 | 踏み惜しみつつ鎌倉の銀杏黄葉 | 19811124 |

| | | | |
|-----------------|----------|------------------|----------|
| ウインドに背まるく映る師走町 | 19811200 | えぞかんぞう岬はるか異国なる | 19820629 |
| 晦日そば孫の食べさま頼もしく | 19811200 | 昆布乾すさいはての島明易し | 19820629 |
| 窓の梅ほころびゆくをみるしじま | 19820200 | 獅子独活の花眼の限り能取岬 | 19820706 |
| 散り梅のかかり濯ぎのもの乾く | 19820200 | 鷺草の鷺二羽となる娘に甘え | 19820706 |
| 春遠しこもれる叔母に京の菓子 | 19820200 | 魂迎ふ一人となりて古家守る | 19820800 |
| 受験生泊めて祈りを同心に | 19820300 | 手ごなしで土をかぶせる秋の種 | 19820629 |
| 日脚伸ぶ中洲に群れる鳥の白 | 19820300 | 豪雷にいさかふ妹弟抱き合ふ | 19820629 |
| 露の臺焼みその香の朝厨 | 19820300 | 亡娘ノート紙魚生きている悲しさよ | 19820629 |
| 散る花の流れゆくあり踏まるあり | 19820407 | 秋立ちぬ束ねてさせり亡母の櫛 | 19820629 |
| 天主より振る手呼ぶ声花の中 | 19820400 | 晚菊の咲くや明日より他人の庭 | 19821000 |
| 葱坊主垣越しの子はよくしゃべる | 19820500 | 引き越しの荷隅にかばふ冬すみれ | 19821000 |
| 耳遠く笑顔で応ふ木の芽雨 | 19820500 | 秋そゞろ引越荷物嵩む部屋 | 19821000 |
| 草餅にふと道変へて娘に急ぐ | 19820500 | 秋風も他人もやさし移り住み | 19821100 |
| 直ぐ消ゆる足跡砂に五月旅 | 19820511 | 見捨てかね新居に挿せり倒れ菊 | 19821100 |
| 風光る砂丘を踏めば若返る | 19820511 | 寛ぎて見る山荘の紅葉濃し | 19821100 |
| 石段のあえぎに著莪の花やさし | 19820512 | 乗りおくれくやしき顔に冬の月 | 19821100 |
| 単線の停車は長し青田風 | 19820600 | 寒椿にぶる起ち居のすべもなく | 19821200 |
| 花栗の香に堂守の鍵開く | 19820700 | 友呼ばむ一人に余る日向ぼこ | 19821200 |
| 老鷺や堂守力こめて説く | 19820629 | 転宅の迫りし庭の実むらさき | 19821000 |
| 知床の大雪溪に昼の月 | 19820629 | 移り住む名残の菊香衰えず | 19821000 |
| 雪溪を映し知床五湖寂と | 19820629 | 玉砂利に歩の乱れなし神の留守 | 19821000 |

| | | | |
|-----------------|----------|-----------------|----------|
| 大役の初旅富士が雲間より | 19830103 | 一族の年長となり魂まつる | 19830800 |
| 梅日和白壁光る村一望 | 19830200 | 動かぬ灯動く灯一望盆の果 | 19830800 |
| しつけとる春立つ朝の装ひに | 19830300 | 洗ひ髪立つペランダの風は秋 | 19830800 |
| 水ぬるむ就職決り紅さす娘 | 19830300 | 蕎麦三日食べてさわやか信濃旅 | 19830904 |
| 桜餅娘の訪ひくれし小半日 | 19830300 | 色鳥や岳に真向ふ湖の宿 | 19830900 |
| 目口なき紙の雛や掌になじむ | 19830300 | 大き鳥湖上を舞ひて夏去れり | 19830900 |
| 裏の家の雨に堪へ咲く八重桜 | 19830400 | 庭紅葉もえて謡に力声 | 19831100 |
| 友の情雨に摘みきしわらび飯 | 19830400 | 謡ひ果て山荘黄葉をのこし暮る | 19831100 |
| 忌に集るしのぶ日がなを花の雨 | 19830400 | 翅やすむ蝶もむらさき式部の実 | 19831100 |
| 楠公通の大楠学校庭に移し植え | 19830400 | 独り居のよき日淋し日菊挿して | 19831100 |
| 除り去らる囀り包む街の樹が | 19830400 | 疎く住み安けき日々や杜鵑草 | 19831100 |
| 読むも憂し眺むも憂しや花の雨 | 19830400 | 屑金魚育ち掬ひし児も少年 | 19831100 |
| 集ればお国訛よよもぎ餅 | 19830400 | 案内三日京の紅葉に酔ひ疲る | 19831100 |
| 秩父路につづく芽桑の夕映えて | 19830407 | 照紅葉京一望の峯の寺 | 19831100 |
| 万緑や一言神に願一つ | 19830521 | 山荘の集ひに菜飯冬ぬくし | 19831207 |
| 田植機の若者帽子に赤い花 | 19830521 | 冬入日竹叢透し荘なごむ | 19831207 |
| 桜桃たわわの国へ喜寿の旅 | 19830611 | 一とせを会ひ得ぬ人の賀状増し | 19840100 |
| 杖たよる友出迎へに梅雨はげし | 19830700 | しきたりをつづけて独り屠蘇機嫌 | 19840100 |
| 朝涼し咲きつぐ花を供華日記 | 19830700 | トンネルを抜ける度雪深くなり | 19840102 |
| 引き越して来たる浜木綿咲き安堵 | 19830700 | ただいまと灯せば応ふ室の花 | 19840200 |
| 娘三人訪ひくれ風鈴よく鳴れり | 19830700 | ちゃん呼びで遠き日戻る木の葉髪 | 19840200 |

| | | | |
|-------------------|----------|------------------|----------|
| 春寒やぱったり出会ひ出ぬ名前 | 19840200 | 思はざる遠富士すゝきの小窓より | 19840900 |
| 争ひも夢よ首塚土筆の芽 | 19840300 | 朝風に彩をひろげてのうぜん花 | 19840700 |
| 老夫婦夜をばつぼつとひなあられ | 19840303 | 風涼し天主の床の黒光り | 19840700 |
| 雪解風由布岳さして大鴉 | 19840305 | 俳聖殿忍者屋敷も蟬しぐれ | 19840900 |
| 土を割る花芽それぞれ色ありて | 19840300 | 秋涼し絵とき説法に笑ひあり | 19840917 |
| によきによきと花芽ラッシュの庭の土 | 19840300 | 水軍の洞の跡や秋の潮 | 19840917 |
| 花苺児にしやがみ見す苺の粒 | 19840400 | 青い眼の手ぶりに見入る踊の輪 | 19840800 |
| 朝毎の独りに足りる庭苺 | 19840500 | 諷刺歌踊りの櫓は高調し | 19840800 |
| 団地住みテレビの上の兜の威 | 19840500 | 送り火やもとの一人に戻る夜 | 19840800 |
| ホース先そらせばそこも青蛙 | 19840700 | 帰省子の言葉大人ひふと淋し | 19840800 |
| 花南天隣初嬰の襁褓干す | 19840700 | 若者となるは別れか鳥雲に | 19840800 |
| 待ちつつも一人を涼しと思ふ日も | 19840800 | 夏霧の湧きて流れて山の湖 | 19840700 |
| 庭茂り払ふ枝にもある生命 | 19840800 | 山茶花の垣咲き始め謡声 | 19841100 |
| 孫の名をとりちがえ呼ぶ盆家族 | 19840800 | 冬の雲まこと知らせぬ人見舞ふ | 19840000 |
| 夏萩に誰みくじ結ふ禁よそに | 19840800 | 年忘れ流す憂さなきワインの香 | 19841200 |
| 忌ごもりの友訪ひて泪つ戻り梅雨 | 19840700 | 賀状書く亡母の字に似る母の年令 | 19841200 |
| 夏書終へ東塔西塔仰ぐ朝 | 19840600 | 寄せ鍋の沸々はずむ故郷ことば | 19841200 |
| 空と無の多き夏書や朝鴉 | 19840600 | するつと食ぶ熟柿に郷愁そぞろ湧く | 19841200 |
| りんどうや標高識のたつ小駅 | 19840900 | 吾が誕生秋刀魚で祝ひ心足る | 19841100 |
| 高原列車おそしとゆれる花すすき | 19840900 | 初富士や大東京の隅に住み | 19850100 |
| 紫の小波たてり松虫草 | 19840900 | 林立の煙突富士に初煙 | 19850100 |

| | | | |
|--------------------|----------|-----------------|----------|
| 初仕事裾野の町の白煙 | 19850100 | 働けることの幸玉の汗 | 19850800 |
| 移し植え三年の梅に初つぼみ | 19850200 | 言ふだけで気のすむ愚痴に団扇風 | 19850800 |
| 陽を集め日毎ふくらむ木瓜の花 | 19850200 | 階暑し団地こつこつセールスマン | 19850900 |
| 蘭匂ふ独りの部屋に惜しき程 | 19850300 | 梅雨しめる記帳簿將軍旧居訪ひ | 19850625 |
| 逆縁の香たく背なに春空し | 19850200 | 苔の花將軍愛馬の小さき塚 | 19850625 |
| 春や憂し着かえし裾の静電気 | 19850400 | 將軍旧居もちの花 | 19850625 |
| 割れ込まれ句心とぎれぬ春炬燵 | 19850300 | 意を通し過ぎし淋しさ夏の蝶 | 19850625 |
| 初蕨（わらび）雨に持ちくれ留守の扉に | 19850400 | 小駅の時計おそしと思ふ時雨来て | 19851119 |
| 名にひかれ植え初花をひめ辛夷 | 19850400 | 名もゆかしこほろぎ橋の溪紅葉 | 19851120 |
| 天主より眺むる花の城下町 | 19850421 | 冬の雷一発のみや能登に泊つ | 19851120 |
| 階高し一打の鐘に花の散る | 19850421 | 冬ぬくし見舞ひし友にもてなされ | 19851200 |
| 老鶯に耳あそばせて喜寿の足 | 19850509 | 謡声白山茶花の垣流れ | 19851200 |
| 蝸牛わがもの顔に城跡の碑 | 19850509 | 小説の終りのごとく落葉散る | 19851200 |
| ぶちぶちと峠に摘めり夏わらび | 19850618 | 愛語りし腰掛石や昼ちちろ | 19850000 |
| 木苺の酔っぱ甘さや溪流に | 19850617 | 曼茶羅に政子のむかし秋そぞろ | 19850000 |
| 塗るかへて狭庭の客に青蛙 | 19850600 | 露けて墨のうすれしいわれ書 | 19850000 |
| 花ざくろ觸れて硬しや朱の色 | 19850600 | 輪飾りの小さきをかけ団地の扉 | 19860100 |
| 御名のごと清らに生きて蓮花 | 19850600 | 寒木瓜の紅を深めて雨上る | 19860100 |
| たまはりし紫式部さわ咲けど | 19850800 | 盆梅や鉢の木謡ひたき夜なり | 19860100 |
| 短夜や句机ならぶ夢の切れ | 19850800 | 成人の日の背広着し子を見上ぐ | 19860200 |
| 夜濯ぎて一日終りぬ恙なく | 19850800 | 試験子の窓に憂きほど春深雪 | 19860300 |

| | | | |
|------------------|----------|------------------|----------|
| 弔ひて無口の帰り春吹雪 | 19860200 | 山男めきひげ面の帰省孫 | 19860800 |
| ことなげに抜歯をされて春寒し | 19860300 | 癒ゆること信じてきけり蟬の声 | 19860800 |
| 白梅や三百年を語る幹 | 19860300 | 癒ゆきざししかと涼しき今朝の風 | 19860900 |
| ゆずり合ひつゝ空うばひ梅盛る | 19860300 | 亡母の櫛ふとさしてみる盆支度 | 19860800 |
| 春時雨急げば合はす鍵の鈴 | 19860300 | 杖に頼る試歩の足もと萩こぼる | 19860900 |
| 土を割る花芽それぞれ色ありて | 19860300 | 寝団扇にうちわどころの故郷のこと | 19860900 |
| 書き終えてほつと紅茶の浅き春 | 19860300 | 去ぬ燕便りとたよりすれちがひ | 19860900 |
| 庭隅に鈴蘭匂ひ旅ごころ | 19860400 | 鯛雲交しておかむ生き形見 | 19861000 |
| 屋根草もうすき緑に御寺春 | 19860400 | 風に雲に秋の深みを知る夕べ | 19861000 |
| 枝うつるりすすき生き生きと新樹光 | 19860400 | カタカナ語事典にいどむ老夜長 | 19861000 |
| 散るものは散らして扇塚の春 | 19860400 | 菊の香や来し方遠し五十年忌 | 19860900 |
| 明日に咲く牡丹見よと泊めくれし | 19860500 | 雲を割り冬陽美し退職す | 19861100 |
| 牡丹の今開かむと息づかひ | 19860500 | むなしさも煙としたり菊を焚く | 19861100 |
| 身も心青く染まりぬ宮若葉 | 19860500 | 年用意心のこもる故郷の荷 | 19861200 |
| 山越ゆるあの辺野崎か花曇 | 19860400 | 満目の紅葉それぞれちがふ色 | 19861115 |
| バスの窓遠見を塞ぐ栗の花 | 19860613 | 静かなりいで湯娘と在り去年今年 | 19870101 |
| 蛇の衣板一枚の城跡文 | 19860614 | たまさかの晴着に帯と初芝居 | 19870100 |
| アイスクリーム壳の熱弁落城譜 | 19860614 | シテ謡ひ修めし安堵室の梅 | 19870100 |
| 鳶青し城見ゆ坂のオランダ塀 | 19860615 | 誰が為と笑はれもして初鏡 | 19870100 |
| 青葉冷え天主の跡の落城譜 | 19860615 | 梅白し陽ざしの居間の笑ひ声 | 19870200 |
| 踊太鼓すぐそこにきき足を病む | 19860800 | 男子校女子校つづき芽ふく道 | 19870200 |

| | | | |
|------------------|----------|-------------------|----------|
| 庭の陽を占めて寒木瓜紅の濃し | 19870200 | 文学碑たてる峠に秋の富士 | 19870915 |
| 火廻要領祀符の墨字に春ぼこり | 19870300 | 花すゝき駅近かそうで遠かりし | 19870904 |
| 今日は憂し今日は美しくし木の芽雨 | 19870300 | 招くことコスモス揺るる無人駅 | 19870904 |
| 春愁を恥じて陶狸の腹を撫す | 19870300 | 誰も来ずくつろぐ時の菊日和 | 19871100 |
| 名桜につきぬ名残の里を去る | 19887049 | 老夜長旅に集めし箸袋 | 19871100 |
| 山裾の梨の花園に白昼夢 | 19870415 | とっておきのワインもてなす良夜かな | 19871000 |
| 花クローバ終の棲家の地鎮祭 | 19870500 | 南洲を語る白髪月の部屋 | 19871000 |
| 松の花傘寿を集ふ公の庭 | 19870513 | 紅葉濃し峠二つを越えし温泉 | 19871119 |
| 文学館出でてまぶしき若葉光 | 19870513 | 隣より争ひ声や秋の暮 | 19871100 |
| 目礼がことばよ通院路の茂り | 19870600 | 石路さかり先は稲荷の鳥居径 | 19871100 |
| 青葉雨千人塚の匂ひ濃し | 19870527 | 海知らぬ犬を毎朝冬の浜 | 19871200 |
| 土産店菖蒲と競ふ肥後名所 | 19870428 | 新らしき木の香の中に賀状書く | 19871200 |
| 五月晴阿蘇の寝釈迦に帰途祈り | 19870529 | 看とりつつ句帳かた辺に長き夜 | 19871000 |
| 夏草に五百羅漢のかくれんぼ | 19870709 | 看とり女にある秋晴や特選句 | 19871000 |
| 夏草にあそびつ羅漢の泣き笑ひ | 19870709 | 祭太鼓看とりの窓に遠くきく | 19871000 |
| 自転車で五日の旅の戻り梅雨 | 19870700 | 安眠なき看とりの夜々に虫親し | 19871000 |
| 初咲きの桔梗と供華に朝づとめ | 19870800 | 愛語りし腰掛石や昼ちちろ | 19871000 |
| 夜濯ぎの干場思はず下手な歌 | 19870800 | 露けしや墨のうすれしいわれ書 | 19871000 |
| 八階に住みて音なき遠花火 | 19870800 | 曼茶羅に政子の昔秋そぞろ | 19871000 |
| 早発ちてさかさ富士みむ秋の湖 | 19870915 | 寒青空娘は頬染めて婚約を | 19880100 |
| 霧晴れて小波が消すさかさ富士 | 19870915 | 梅二月婚約成りし娘のまぶし | 19880200 |

| | | | |
|---------------------|----------|---------------------|----------|
| 婚近き娘と春いちご分ちあい | 19880300 | まぐなぎを払ひ百体地藏訪ふ | 19880600 |
| 列車徐行深雪のここに友住ふ | 19880200 | 探ねゆく流れ涼しき溪いで湯（太閤の湯） | 19880700 |
| たまわりし手造り味噌に露のとう | 19880200 | カンナ燃えひしめきあえる養鶏舎 | 19880700 |
| 枯芝にねてにらまるゝはらみ猫 | 19880200 | 雲走り峯にこま草這ひて咲く | 19880700 |
| 春寒や三日もつづく探しもの | 19880200 | 浜木綿にしばらくのこる夕茜 | 19880700 |
| 春灯失せものこゝに出て笑ふ | 19880200 | 故里の植田にうつす己が影 | 19880800 |
| 椿落つ今日も名知らぬ鳥の来て | 19880300 | 錦飾る故郷ならずも茄子の花 | 19880800 |
| ゆかし名ばかり揃えて盆梅展 | 19880200 | 甚平着て今日も碁敵待つ | 19880800 |
| 春潮に水尾ひく連絡船（ふね）のあと幾日 | 19880300 | 叔父跡地ひまわり咲かす家五軒 | 19880800 |
| 終航の間近かき名残瀬戸の春 | 19880300 | 朝顔や一家は北に赴任して | 19880800 |
| 花菜漬土産に訪ひくれ京言葉 | 19880300 | 秋蝶が惜しむ別れの前よぎる | 19880900 |
| 手染めとて淡き春着の京言葉 | 19880300 | 見送りの垣根アベリア咲きこぼる | 19880900 |
| 花冷えて鬼女の棲みける巨き岩 | 19880423 | 滝二つ遠見の台に小手かざし | 19880900 |
| 恐ろしき昔語りや花の里 | 19880423 | 穂すすきのみるみる刈られゆく売地 | 19880900 |
| 杉古りて黒塚ひそと花曇る | 19880423 | 吾が暮し覗いて聞いて青芒 | 19880900 |
| 若やぎて傘寿の集ひ牡丹園 | 19880516 | 秋と思ふホームに目立つ黒い靴 | 19880900 |
| 声低く僧が餅売る牡丹寺 | 19880516 | 爽かや事終へて発つ旅の朝 | 19880900 |
| 手をとりにて笑む道祖神若葉光 | 19880516 | 大秋晴善光寺平一望に | 19880900 |
| 花の雨眠る山湖を去りがたく | 19880517 | 歌声をのせて寄せ来る芒波 | 19880900 |
| 老鶯や奥へとたずね政子墓所 | 19880601 | コスモスのゆれる川沿ひ遊歩道 | 19880900 |
| 旧姓で呼びあふ莊の明易し鎌倉莊 | 19880601 | 母となる娘に寄す思ひ冬ぬくし | 19881100 |

| | | | |
|-----------------|----------|-------------------|----------|
| 実南天紅し娘は母となる | 1981100 | 天主閣仰ぐ茶店の藤こぼる | 19890425 |
| 晚菊や終止符打たん独り住み | 1981100 | 紫陽花の彩拵げゆく遊歩道 | 19890500 |
| 息子と同居決めむ独りの湯豆腐鍋 | 1981100 | 夏三つ葉雨の小やみに摘む留守居 | 19890600 |
| トンネルを出て越前の雪景色 | 1981200 | 母も娘もショートカットにさくらんぼ | 19890600 |
| 仏壇を買ひに越路へ雪清し | 1981200 | 窓開き大向日葵に見つめらる | 19890700 |
| 山ふところに香煙みちて初薬師 | 19890102 | 驕りても向日葵は好き美しくしき | 19890700 |
| 初護摩の煙いただき肩かるし | 19890102 | 留守居して一人に惜しき風涼し | 19890700 |
| 紅梅のふふみしことも友へ書く | 19890000 | 水撒きて陶狸うれしき顔となる | 19890700 |
| 大茶盛廻す茶碗に和気あふれ | 19890100 | 思ひきり水撒き散らす重きもの | 19890700 |
| 寒木瓜の紅流れそう雨つづく | 19890200 | 賞め言葉裏に返さず花クローバ | 19890700 |
| 春寒し故なく心のとがる今日 | 19890200 | 水撒きて木々と話をする留守居 | 19890800 |
| 契約のとれてマフラー忘れ去ぬ | 19890200 | 白粉花空家となりし垣に満つ | 19890800 |
| 雪ごもり写経の日々と紙便り | 19890200 | 病葉のこの量踏みて医に通ふ | 19890800 |
| 春風や繰り上げ帰国のよき知らせ | 19890200 | 鳶舞ふ高野の夏の深き空 | 19890700 |
| 引き越しの迫り咲きつぐ春の彩 | 19890300 | 野猿乗り夏の河原の若者等 | 19890700 |
| 転宅の別れの集ひ鱈すし | 19890300 | グラデオラス店の娘明るく迎へくれ | 19890700 |
| すましたる貴婦人めける柴木蓮 | 19890400 | ボンボンダリヤ活けて村営コーヒ―館 | 19890700 |
| 昼顔や島にたづねる古き墓 | 19890430 | 漁火に想ひそれぞれ宿浴衣 | 19890800 |
| 夕明りのこる卯波や島に泊つ | 19890430 | 盆列車着席までを送らるる | 19890800 |
| 城下町一望にほふ栗の花 | 19890425 | 伝説の湖ははるかに芒原 | 19890900 |
| お天主へ石垣高し松の花 | 19890425 | 湖も山もみるみる消えて霧の海 | 19890900 |

| | | | |
|------------------|----------|-----------------|----------|
| 山の霧流れて速し湖生る | 19890900 | 旅立ちを止めて眺むる強吹雪 | 19900100 |
| のぼり来て賽の河原の細芒 | 19890900 | おくれ咲く紅山茶花の雪化粧 | 19900100 |
| 旅に訪ふドラマ舞台の町も秋 | 19890900 | 潮の香をはこび来る風春近し | 19900200 |
| 久の出会い杖目じると言ふも秋 | 19890900 | 水温みあひる天国てふ川辺 | 19900200 |
| 秋釣の成果に夕餉賑へり | 19891000 | 指圧効きかろき足もと露のとう | 19900200 |
| 秋雨のやまず留守居の夕仕度 | 19891000 | 桃ふふみ声出し笑ふと嬰便り | 19900300 |
| コスモスの身丈を埋めてはるか富士 | 19891000 | 初雛に招かれ曾孫しかと抱く | 19900300 |
| 湧き水の秋澄む池に富士の影 | 19891000 | 亡母の忌や弟としのぶ春炬燵 | 19900300 |
| 天高し誕生釈迦の細き指 | 19891029 | 高々と辛夷咲きみつ城跡園 | 19900300 |
| 落葉かき風に根気の作務の僧 | 19891029 | もてなさる小さき土鍋に土筆煮て | 19900300 |
| 柿届く家なき故郷の友も老ひ | 19891100 | こんがりと焼味噌落のとうほのと | 19900300 |
| 郷言葉の電話果なし老夜長 | 19891100 | 落摘みて老の自慢のちらしずし | 19900400 |
| 命延ぶ泉いただき峯を越す | 19891106 | 一心の白夕闇にほのと浮く | 19900400 |
| 野仏の膝にさい銭紅葉散る | 19891106 | 陶狸の背出で入る鳥の巣づくりか | 19900400 |
| 冬濤の音きゝ紀伊の朝茶粥 | 19891200 | 葉桜や友のギブスはまだ除れず | 19900400 |
| 娘が立てし枕屏風に安眠して | 19891200 | 露座観音見おろす里の柿若葉 | 19900500 |
| 晩菊に名残水やり旅に出る | 19891200 | 柿若葉光る白壁つづく里 | 19900500 |
| 報恩講善女となりてしる粉賜ぶ | 19891029 | 風薫る河童出そうな筑後川 | 19900500 |
| 花車たがへず来たり年用意 | 19891200 | 老鶯に迎えられけり峡の宿 | 19900500 |
| 心ゆくまで謡ひけり年忘れ | 19891200 | 鱧一尾釣りと得意の帰宅ベル | 19900600 |
| 娘の忌日となりて年経る小つもごり | 19891200 | 釣りし鱧ほめて一箸つつ廻し | 19900600 |

| | | | |
|-----------------|----------|-----------------|----------|
| ご協力和酔い甘夏を嫁出し来 | 19900600 | 寄進瓦に筆持つひまも紅葉散る | 19901119 |
| 紫陽花や登山電車は幾曲がり | 19900600 | 庭小春鳩来て犬が少し吠え | 19901200 |
| お世辞とも思ひつつ買ふ夏帽子 | 19900700 | 晩菊や顔見ぬ電話言ひ過ぎし | 19901200 |
| 夏帽子鏡の顔はややすまし | 19900700 | 枯木してはるか富士見る道となる | 19901200 |
| のびて寝る猫のかたへに端居して | 19900700 | 数の子の歯音うれしや八十路三つ | 19910101 |
| 待つ荷物おそし木樺はしばみ初む | 19900700 | 初詣極楽寺てふ名にひかれ | 19910102 |
| 鎌倉の御寺涼やか友葬る | 19900700 | 初旅や全き富士に真向へり | 19910100 |
| 母として慕はれ甥とビールくむ | 19900800 | 立春の陽に勇氣湧きトレーニング | 19910200 |
| 風鈴や父母知らぬ甥よき父に | 19900800 | 足鍛え眠り覚めたる山のぼる | 19910200 |
| 五十年忌修すあの日も秋暑く | 19900800 | 人波に流されてみる梅まつり | 19910200 |
| 巨寺にみちのくらしき萩まつり | 19900900 | 指呼の山みるみるかくす春吹雪 | 19910219 |
| 雨上がり紅たわゝなるりんご園 | 19900900 | 舞へ狂へいで湯ごもりの春吹雪 | 19910219 |
| 子に孫にりんご送りて津軽旅 | 19900900 | ほの酔ひや孫つぎくれしお白酒 | 19910300 |
| 台風もよしといで湯にやり過ごし | 19900900 | ひなの前老も交りて撮る今宵 | 19910300 |
| 久に來し皇居のお濠曼珠沙華 | 19901000 | 梅林へ少しの坂も手を引かれ | 19910310 |
| コスモスの風に流せるほどの些事 | 19901000 | 白梅の古木に希ふ吾が余生 | 19910310 |
| ただ声をききたく夜長の遠電話 | 19901000 | 湖見ゆる観音堂の大桜 | 19910400 |
| バスを待つこわれベンチに秋の蝶 | 19901000 | 芽柳の日々に大ゆれ風青し | 19910400 |
| 茫々の芒の中や美人塚 | 19901110 | 花散るや石州瓦の光る村 | 19910400 |
| 神在月とガイド熱あり出雲路よ | 19901110 | 初蝶や癒えて佇つ庭彩ふえて | 19910400 |
| 濃紅葉座禅堂の扉はかたく閉じ | 19901119 | 初蝶やふつつり切れし思ひごと | 19910400 |

| | | | |
|------------------|----------|----------------|----------|
| 新茶賜ぶ少年今は病院長 | 19910500 | 秋場所の終り落ちつき夕支度 | 19910900 |
| 芍薬や三度の転居共にして | 19910500 | ゆかしさに秋七草の寺巡り | 19910900 |
| 染め止めて白髪軽し青葉風 | 19910600 | 尊氏も正成も美男菊衣 | 19911000 |
| 年令らしく白髪でおしゃれ夏帽子 | 19910600 | 天高し八十路二人が峯にイッ | 19911000 |
| 釣り土産べらとはうれし瀬戸育ち | 19910600 | 穂芒の波うねうねと芒山 | 19911000 |
| 早苗田の日毎濃くなる療の窓 | 19910600 | 秋茄子を嫁にすすめて共笑ひ | 19911000 |
| 山の湖万緑の中遠くあり | 19910600 | 神有りの出雲の湖はかもめ舞ふ | 19911100 |
| 山間の夏霧深き駅に着く | 19910700 | 穴道湖の大橋たもと柳散る | 19911100 |
| 立葵彩を揃えて山の駅 | 19910700 | 穴道湖の秋の入口に出合ひけり | 19911100 |
| 葉草湯の香りのこりて宿浴衣 | 19910700 | 名菓舗の近くに石焼芋の声 | 19911100 |
| 大寸の宿衣たぐりて岩魚膳 | 19910700 | 鳴き砂を踏めば聞えし秋の声 | 19911100 |
| 億の土地我がもの顔に青すすき | 19910800 | 白髪を少しのぞかせ冬帽子 | 19911200 |
| 通院の道は川沿ひ月見草 | 19910800 | もう一度鏡をのぞく冬帽子 | 19911200 |
| 時計おそし独り留守居の小粒ぶどう | 19910800 | 久に会ふ少しおしゃれに冬帽子 | 19911200 |
| 秋暑しビルの掃除夫見上ぐ窓 | 19910800 | 諦めもした犬癒えて冬ぬくし | 19911200 |
| 保養所のヴェランダ踊りの列を見る | 19910800 | 独言ならずチロとの話始め | 19911200 |
| 踊りうちわよべの土産と保養友 | 19910800 | 愛犬のチロも淑氣の尾をふれり | 19920100 |
| 秋の湖哀話流して遊覧船 | 19910900 | 年の夜吾より古き茶棚拭く | 19911200 |
| 温泉の町にお湯かけ地蔵秋うらら | 19910900 | 立春大吉吾より古き茶棚拭く | 19911200 |
| 敬老日ほの酔はされて若返る | 19910900 | 名水へ凍ての溪路手をひかれ | 19920103 |
| 誰が家ぞ芒刈られて地鎮祭 | 19910900 | 謡初帯山小さく装ふ同志 | 19920100 |

| | | | |
|-----------------|----------|------------------|----------|
| 謡初足のねぢりを許し合ひ | 19920100 | いそいそと半袖えらび旅立てり | 19920500 |
| 保養所で看る東京の雪ニユース | 19920200 | 山迫る車窓次々藤の花 | 19920500 |
| お返しを気にする老や冬いちご | 19920200 | 若葉風亡妹の友とめぐり逢ひ | 19920500 |
| 大山ははるか田に群る白鳥かな | 19920200 | 短か夜や亡妹の友と泊つ出雲 | 19920500 |
| 旅帰り待ちくれ紅梅咲き満つる | 19920200 | ビール酌むかちんとグラス若やぎて | 19920600 |
| 紅梅や吾が色にせむと言ひし亡友 | 19920200 | ビール酌むドラマのように共鳴し | 19920600 |
| 梅の闇逢ふ日約せし友逝きぬ | 19920200 | ビール乾し少し多弁に刻忘る | 19920600 |
| 旅はずむ卒業進学祝ぎ二つ | 19920300 | 向日葵が君臨空地の草いくさ | 19920700 |
| たまさかの母と息子の旅春の虹 | 19920300 | 木樺咲く一日の花の教えごと | 19920700 |
| 春眠の十指ほぐしつ今日へ覚む | 19920300 | 垣根ばら互の無事を老犬と | 19920700 |
| 春セーター鏡に肩のうすきこと | 19920300 | 夕仕度水の出細き大暑かな | 19920700 |
| 美しく老いたきものよ柴木蓮 | 19920400 | 開け放つ窓に早起き木樺かな | 19920700 |
| シクラメン茶の間笑ひ溢れさす | 19920400 | 酌みもして婿の気配り涼しき餉 | 19920700 |
| ふる里はすみれたんぽ墓の径 | 19920400 | 倒産の去りゆく一家百日紅 | 19920800 |
| 桃の花さら前かけの辻地蔵 | 19920400 | 一言がちくりと秋の草に棘 | 19920800 |
| お遍路の憩なる礎石大伽藍 | 19920400 | 遠富士の景ある売地草茂る | 19920800 |
| 菜の花を手いっぱい摘み日毎漬け | 19920400 | 芝生踏む素足に伝ふ今朝の秋 | 19920800 |
| 日々摘めど菜の花畑の黄は濃ゆく | 19920400 | 新涼や試歩の芝生に笑み交す | 19920800 |
| 花杏真白従妹に甘え気味 | 19920400 | 高階に寝て眺め居り雲の峰 | 19920800 |
| 芍薬の蕾ふくらむ庭の日々 | 19920500 | 霧にまだ眠る町並試歩はげむ | 19920900 |
| 発つ朝にうす紅ほのと花水木 | 19920500 | 夏霧の深し湯の町まだ覚めず | 19920900 |

| | | | |
|-----------------|----------|-----------------|----------|
| 回廊に沿ふ白萩に清めらる | 19920900 | いさかひが笑ひに母と娘の冬至 | 19921200 |
| 水攻めの城跡や蓮の実の大粒 | 19920900 | 年用意母と娘の声いづれとも | 19921200 |
| 苗木より三年無花果三つ熟れる | 19920900 | 部屋に冷ゆ胸像の夫に独り言 | 19921200 |
| 長生きに想ひいろいろ敬老日 | 19920900 | 行く年へ刻む時計に息つめて | 19921200 |
| 秋灯下親しきものは虫眼鏡 | 19921000 | 我が城と正月飾り四疊半 | 19930100 |
| 保養所の昼餉にぎやか大秋刀魚 | 19921000 | 繰るほどに夢ふくらみ来初暦 | 19930100 |
| 露芝生試歩の目標果し得て | 19921000 | 二日早帰る子送る母の背 | 19930100 |
| 秋日和木椅子に一病話し合ふ | 19921000 | 好物で老犬はげます寒の入 | 19930100 |
| シャッターを頼む一会や寺紅葉 | 19921000 | 居候の老に朝毎寒玉子 | 19930100 |
| 庭園灯淡きに和せぬ木犀の香 | 19921000 | 老犬と共に留守居す梅日和 | 19930200 |
| 実梅の香まこと顔して嘘をきく | 19920700 | 老犬の背に紅梅の一片が | 19930200 |
| 夜の仏間大蜘蛛打ちて逃がしけり | 19920700 | 一跳ねに広がる水輪水ぬるむ | 19930200 |
| 耳遠く独りもよしと新茶汲む | 19920700 | 春立ちぬ川面は白き雲浮かべ | 19930200 |
| 魂迎ふやがては迎えらるる吾 | 19920700 | 白き雲浮かべ川面は春立ちぬ | 19930200 |
| 帰省子に一夜越し方きかれけり | 19920700 | 倅せは菌音にありし年の豆 | 19930200 |
| 山荘の富士見ゆ窓に姫りんご | 19921100 | 今日よりはチロ居ぬ生活春寒し | 19930330 |
| 夜霧匂ふ同郷なりし荘の主 | 19921100 | 姫こぶし一輪樹下にチロは死す | 19930330 |
| 天高し無傷の紺を飛機が割る | 19921100 | 春嵐おさまる朝にチロは死す | 19930330 |
| セーターの赤を鏡に問ふ八十路 | 19921100 | 春寒しピンクの布に巻く屍 | 19930330 |
| 声高や桜紅葉の女子校道 | 19921100 | 窓開けばおやつ待つチロ無き余寒 | 19930330 |
| 迎えられ娘の柚子風呂の香りかな | 19921200 | 従姉妹どち幼な呼びして桃の郷 | 19930400 |

| | | | |
|------------------|----------|-----------------|----------|
| 故里や摘みてたちまち木の芽和え | 19930400 | 明易すや退院といふ別れかな | 19930513 |
| 故里はお遍路の鈴あわあわと | 19930400 | 濃紫陽花点滴の染みうすれゆく | 19930513 |
| 朧夜や骨までしゃぶる瀬戸の味 | 19930400 | 錠剤をならべ数えて夕薄暑 | 19930700 |
| 短夜やはらから集ふ郷言葉 | 19930400 | 負け相撲少し頭痛の戻り梅雨 | 19930700 |
| 老鶯に迎え送られ札所寺 | 19930400 | 連れだちていそいそ母娘浴衣買ひ | 19930700 |
| 仁王門くぐりて見上ぐ余花やさし | 19930400 | 連れだちて母娘の購む派手浴衣 | 19930700 |
| 牡丹や余生つきこむ花づくり | 19930400 | 浴衣茶会立居気になる娘を送る | 19930700 |
| 新背広卒業の子を見上げけり | 19930400 | 月下美人迎へ車で御対面 | 19930700 |
| 祝背広就職といふ巢立かな | 19930400 | 月下美人息を弛めず咲き拡ぐ | 19930700 |
| 就職は別れの一つ鳥雲に | 19930400 | 手伝ひ娘不満あるげに水を打つ | 19930700 |
| 散華とも霊園しとど花吹雪 | 19930400 | 咲きましたとて嫁が見す鶯草鉢 | 19930800 |
| 咲き競ひし源平桃も葉となりぬ | 19930500 | 鶯草の飛びさる舞ひよう目離せず | 19930800 |
| 藤娘出そう藤房ととのへり | 19930500 | 水撒けば陶狸がうれし涙する | 19930800 |
| 三代の旅信濃路を青葉風 | 19930500 | これはまあ皿をはみ出る初秋刀魚 | 19930900 |
| 大手まり真白湯の香の中にゆれ | 19930500 | 倉裡裏の鬼灯赤し妻若し | 19930900 |
| まじり気のなきみどり嶺よ露天風呂 | 19930500 | 猫難の子雀放つ秋彼岸 | 19930900 |
| 峯八分疲れは軽し藤の花 | 19930500 | 雀獲りしかり猫抱く秋彼岸 | 19930900 |
| からみ合ひ花房乱る深山藤 | 19930500 | 映る影流るる音も水の秋 | 19931000 |
| 子に植えし桜桃熟るる少女有美 | 19930400 | 秋晴やいそいそ釣に碁敵と | 19931000 |
| 遍路憩ふ礎石千年語りつく | 19930400 | 秋晴や碁敵はまた釣がたき | 19931000 |
| 点滴の紫班をさする梅雨の窓 | 19930605 | 釣りし沙魚はねる厨にはや碁音 | 19931000 |

| | | | |
|------------------|----------|------------------|----------|
| 雁渡る双手で握手する別れ | 19931000 | 春寒やもう夢でしか逢へぬ人 | 19940109 |
| 口釜へ増ゆる孫との日向ぼこ | 19931000 | 頑張れよ愛犬館も初日さす | 19940100 |
| 柿送る案内電話の郷言葉 | 19931000 | 受験子に買ふ知恵袋文殊さま | 19940116 |
| 柳散る入日に染まる湖のほとり | 19931100 | 春寒し起ち居いちいち声あげて | 19940200 |
| 五指ほぐすなだむ節おし今朝の秋 | 19931100 | 中古車群旗はたはたと春を呼ぶ | 19940200 |
| 夜逃げとや閉させる窓に満月光 | 19931000 | 猫柳活ける娘もまたつやつやし | 19940200 |
| 人恋ふかに垣越し延び来青き鳶 | 19931000 | 花葉挿しふと京の友思ひけり | 19940200 |
| 猫舌は母似亡母恋ふ湯豆腐鍋 | 19931200 | 再会や土を割り出る花芽たち | 19940300 |
| 物言はず一日留守居の師走呆け | 19931200 | 分葱和へおふくろ味の老自慢 | 19940300 |
| 冬日向売れぬ空地は猫のもの | 19931200 | 名もゆかし若草豆腐のうすみどり | 19940300 |
| カレンダーも庭も山茶花日々惜しむ | 19931200 | 点心に一口ほどのたらの芽よ | 19940300 |
| 柚子ほめてつい佇ち話いただけり | 19931200 | 茄子胡瓜畑銀座と故里便り | 19940600 |
| 留守居して米研ぐ窓に寒宵月 | 19931200 | 額の花一人で居たき時もあり | 19940600 |
| 大晴れや蒲団干す家干せぬ家 | 19931200 | 夏帽子のぞく白髪も好しとして | 19940600 |
| 爪切りて指美しや賀状書く | 19931200 | 夏帽子年齢をきかれて逆に問ひ | 19940600 |
| 吹き溜る枯葉の中の紅一葉 | 19931200 | 山梔子の真白につらき雨つづく | 19940600 |
| 宵戎押さへ揉まれて娘はきげん | 19940100 | 青葉風入れてもきれぬ愚痴話 | 19940600 |
| ただいまの娘の声弾む宵戎 | 19940100 | 言ひたきをたたむくちなし真白なる | 19940600 |
| 初釜へ晴着見送る母も美し | 19940100 | 辻地蔵朝取りトマトにお眼細く | 19940700 |
| はよ来ませ郷言うれし初電話 | 19940100 | 暑に耐える白前掛の辻地蔵 | 19940700 |
| 寒玉子盛りあがる黄身老もまた | 19940100 | 青田風通し一睡の浄土かな | 19940700 |

| | | | |
|------------------|----------|------------------|----------|
| 喉走る名水冷えの心太 | 19940700 | 手折り来て芒挿しくれホーム友 | 19940900 |
| 空暗し呼べば遠退く夕立雲 | 19940700 | 敬老日過ぎて忘れを詫ぶ息子かな | 19940900 |
| 今日も亦他所夕立とそれにけり | 19940700 | 夕木槿一日思案し言ふまじと | 19940900 |
| 花合歓や溪の音きく温泉の窓 | 19940700 | 傷つけしことに氣附かず青芒 | 19940900 |
| 含羞草いで湯泊りの老四人 | 19940700 | 押し分けも背伸びもなくて草の花 | 19940900 |
| 故里は金比羅歌舞伎花の山 | 19940400 | 侘びて住むごと庭隅の時鳥草 | 19941000 |
| 岐れ道ミモザ盛りの島巡り | 19940400 | 住むは誰隣の芒刈られけり | 19941000 |
| 一言の棘のいたみや夏薊 | 19940700 | 息子に目立ちきし白きもの柿をむく | 19941000 |
| 一言の棘に猛暑の雲みあぐ | 19940700 | 高階に泊つ霧ぬれの大夜景 | 19941000 |
| 風鈴や窓辺に母と娘の笑顔 | 19940700 | 秋灯に左傾ぎの寿百の字 | 19941000 |
| 昼寝覚めまだ侍り猫伸びきつて | 19940700 | ふる里や菜飯に小芋の煮ころがし | 19941100 |
| シルバーホーム笑ち会釈して廊涼し | 19940800 | 大根抜く厨に待つはおろしがね | 19941100 |
| お元氣ねきれいに食べし夏料理 | 19940800 | 木あがりの茄子見落さず芥子漬 | 19941100 |
| 西瓜割漢につづく娘が果す | 19940800 | 木あがりの茄子と思へぬ芥子漬 | 19941100 |
| 踊の輪みるみる三重に炭坑節 | 19940800 | そつと出る夫追ふ妻や露の畑 | 19941100 |
| 高階に眼覺めてわつと雲の峰 | 19940800 | 医と寺の娘が幼な友木の葉髪 | 19941100 |
| 熱帯夜慣れて別れのなにとなう | 19940800 | 秋風や札所の寺の大礎石 | 19941100 |
| 朝涼や肩まで掛けてふと淋し | 19940800 | 木犀匂ふ金銀並びし故里の庭 | 19941100 |
| 雲の峰息子は太平洋の空ならん | 19940800 | 着ぶくれて椅子のくぼみに孫自慢 | 19941200 |
| 満月や仰ぎし友はいま筑紫 | 19940900 | ほほえみで答ふ遠耳冬すみれ | 19941200 |
| 月白やせり上り待つ大舞台 | 19940900 | 言ふだけを言ふてコート忘れ物 | 19941200 |

| | | | |
|------------------|----------|------------------|----------|
| 爪切りて指美しく賀状書く | 19941200 | 蹟きて土筆三本折りて詫ぶ | 19950300 |
| 保養所の握手の別れ紅葉散る | 19941200 | 雪柳白壁拒み闇寄せず | 19950400 |
| 晩菊にそとさよならをしばし旅 | 19941200 | 白壁の汚れはじらふ雪柳 | 19950400 |
| 物忘れめつきり増えて年の暮 | 19941200 | ワインの栓ぼんに拍手や夜はおぼろ | 19950400 |
| 晩菊の一本供花とし剪りにけり | 19941200 | 花は葉に母の素直は息子の憂ひ | 19950400 |
| 補聴器を切りて一人の冬の夜 | 19941200 | 応えなく平寝落ちしよ花疲れ | 19950400 |
| ほんのりと米寿の頬に屠蘇の紅 | 19950100 | 落ち椿さつさと主掃きにけり | 19950400 |
| 倅せは初夢もなき深眠り | 19950100 | 兄弟が初鯉のぼり揚げにけり | 19950500 |
| 住連飾りドアにかけて十二階 | 19950100 | 母の日に娘二人の遠電話 | 19950500 |
| 開かんと冬薔薇秘めし力かな | 19950100 | 母の日や六十年を母の道 | 19950500 |
| 梅一輪いちりん日々を留守居して | 19950200 | 岐れ道えらべば險し果の余花 | 19950500 |
| 倅せや日々の留守居に梅一輪 | 19950200 | 試歩のぼす思ひたがわず藤の花 | 19950500 |
| 紅梅や白磁揃ひの朝餉の膳 | 19950200 | 絵タイルの道若やぎて地球の日 | 19950500 |
| 話す日々米寿祝の冬ばらに | 19950200 | 高きほど大揺れてをり夾竹桃 | 19950600 |
| 毛糸解く編み直されぬ過去てふもの | 19950200 | 雑草の茂りたくまし子もたくまし | 19950600 |
| 春寒し幼なに戻るおないどし | 19950200 | 草いくさ陣地広げし青芒 | 19950600 |
| 空地占め空の青吸ひ犬ふぐり | 19950300 | 葉を研ぎて陣地広げむ青芒 | 19950600 |
| 枕に浮くさみどりを吸い春一番 | 19950300 | 職退くも余生と言へぬ梅青し | 19950600 |
| 朝桜夢のあと追ふ思慕の人 | 19950300 | 娘名で忌の案内状梅雨じめり | 19950600 |
| 聞くだけで事情を愚痴の春炬燵 | 19950300 | 海の風山の風入れ夏座敷 | 19950700 |
| 蹟きて掌をつくところ土筆んば | 19950300 | 夕木槿汚れなき白閉じにけり | 19950700 |

| | | | |
|------------------|----------|-------------------|----------|
| 春秋を裾にひろげて讃岐富士 | 19950700 | 栗むくや消えぬ弟の国訛 | 19951100 |
| はいはいと重ねてさびし含羞草 | 19950700 | 故郷もつ倅せしかと柿をむく | 19951100 |
| 眠り草ねむらぬ葉あり反抗期 | 19950700 | 文化の日遠き明治の今日生れ | 19951100 |
| 装ひし遠き日のあり薄衣 | 19950700 | 透きとおる秋や少年ハーモニカ吹く | 19951100 |
| 咲き満つもなほあわあわと花みずき | 19950700 | 鯛雲告げたき人は遠く住み | 19951100 |
| 花水木乙女の恋の物語 | 19950700 | いま倅障子をよぎる鳥の影 | 19951200 |
| 故郷発つ朝採りトマト重すぎて | 19950700 | 山茶花や豆腐屋を待つ留守居役 | 19951200 |
| 傷つけしこと気付かずや青芒 | 19950800 | 冬桜口紅うすくひく米寿 | 19951200 |
| やさしくも棘ある言葉夏薊 | 19950800 | 騙されてをれば事なし枯尾花 | 19951200 |
| 夏瘦せを知らずに生きて米寿かな | 19950800 | 梅ヶ枝の終の一葉の散る別れ | 19951200 |
| 掌中の珠とはこれよ白桃むく | 19950800 | いつまでも御元気でねてふ賀状の数 | 199601 |
| 無花果を鳥につつかれ犬叱る | 19950800 | 退職と一筆添へし賀状かな | 199601 |
| 新涼や又取り出して読む佳信 | 19950800 | 初入日三六六の一を呑み | 199601 |
| 爽やかや返書のペンのよくすべり | 19950800 | ページくる吾が音寒し影寒し | 199601 |
| 鳥わたる返書に三色ボールペン | 19950800 | 小豆粥老ひてすこやか姉弟 | 199601 |
| 露けしや二人の友の新佛 | 19950800 | 春寒し言はでききをり二度話 | 199602 |
| コスモスに手をふる急行待避駅 | 19951000 | 鳥は雲に二度行くスーパ―買いわすれ | 199602 |
| 秋夕焼こつくりさんの道標 | 19951000 | 梅二月八十路わきまふ笑顔よき | 199602 |
| 出ぬ電話そうか今宵は月の句座 | 19951000 | 娘等去にてかろき疲れに窓の梅 | 199602 |
| 家の味継ぎて伝えて祭ずし | 19951000 | よきことを知らす娘の声梅紅し | 199602 |
| 貰ふなら遠慮はすまじ秋茄子 | 19951000 | 芽吹く庭健かと木々に呼びかけて | 199603 |

| | | | |
|-----------------|--------|------------------|--------|
| 鳥雲に謝しつつ辛き車椅子 | 199603 | 夕涼し肌になじみし藍の服 | 199607 |
| 鶯やに車椅子停めくれ息子よ | 199603 | 暑からむ遅れて浴びる百視線 | 199607 |
| とてせめて電話は春の声 | 199603 | 端居して出世無縁の長寿眉 | 199607 |
| 春彼岸弟訪ひくれ仏顔に | 199603 | 暑に耐えし頬なでてみる今朝の風 | 199608 |
| 岬うらら成果一尾の小半日 | 199604 | 秋暑し訪問販売二度のブザー | 199608 |
| 春の夕餉釣りし一尾を母の前 | 199604 | 夜々うれし子の友に賜ぶ古梅酒 | 199608 |
| 快気とはかくもうれしき春の朝 | 199604 | 花火見に橋へ子が押す車椅子 | 199608 |
| 春光やを拝み浴びをり癒え兆 | 199604 | 癒へてつくる迎え送りの盆団子 | 199608 |
| 怪端の小さき笑顔犬ふぐり | 199604 | 白萩や見知らぬ同志笑みかわし | 199609 |
| 鯉のぼりたゝかく揚げて待つ帰国 | 199605 | 寺育ち白曼珠沙華燃え知らず | 199609 |
| 日本を知らぬ児を待つ武者飾り | 199605 | 風やさしコスモスやさし車椅子 | 199609 |
| 薔薇咲かせ迎え明るき指圧院 | 199605 | 思はざる花つけにけり秋の草 | 199609 |
| 土産地路香りひろげて国言葉 | 199605 | 秋冷ゆる友の情の京しるこ | 199609 |
| 木の芽雨偲び草とて届く茶器 | 199605 | 故里や出会ふたれかれ野菊晴 | 199610 |
| 片隅に生きる幸せ額の花 | 199606 | 栗むきつ老ひて姉弟郷言葉 | 199610 |
| 新茶くみほめ言葉待つ母の顔 | 199606 | 風のまま吾も白髪穂亡や | 199610 |
| 草茂る逆らはぬこと牙につきて | 199606 | 花は実の色増す石榴日々親し | 199610 |
| 明易やドイツ転動ききしより | 199606 | 急げともあわてゐるなども虫の鳴く | 199610 |
| 泰山木朽ちてすがれる花かなし | 199606 | 天高し卒寿見上ぐる明治晴 | 199611 |
| 朝涼やからっぽ頭にからっ腹 | 199607 | 秋深き豆煮る母のひとり言 | 199611 |
| いざ昼寝今日はいづこへ夢の旅 | 199607 | 冬に入る病上手に付き合わす | 199611 |

| | | | |
|------------------|-------|-----------------|--------|
| いつまでも娘は子こたつの母苦言 | 19611 | おばさんと呼びくれ三人桜餅 | 199703 |
| よろこびにふとある怖き夕紅葉 | 19611 | 浮雲に名付けあそびや春の風 | 199704 |
| 熟柿つると食べばふるさと近く来る | 19612 | こちら向くラッパ水仙こんにちは | 199704 |
| 枝桜紅葉に告ぐ別れ | 19612 | 花衣車椅子にも湧くはずみ | 199704 |
| 落葉掃きつい長くなる隣同志 | 19612 | 思い桜樹齡二百を恋う卒寿 | 199704 |
| やがてこの娘が孫の嫁冬いちご | 19612 | 花の雨ワインキーの香に和む | 199704 |
| 雲を割る冬日や老のねがふこと | 19612 | 初咲きの大勺や句や婚の朝 | 199705 |
| お元旦老母くり返すありがたや | 19701 | 桜湯のぱーつとひらけり控室 | 199705 |
| しわのなき黒豆に老母初お箸 | 19701 | 純白の花嫁孫となる五月 | 199705 |
| 初写真嫁孫の笑み三代 | 19701 | 柿若葉秘仏開扉めぐり会い | 199705 |
| 愛犬と話す日日あり寒日和 | 19701 | 来し道の険しさ言はず余花仰ぐ | 199705 |
| 翔ばたいて大きなおまへ初からず | 19701 | 御幣上る薫風にのる上棟歌 | 199706 |
| 五十年忌白梅古りし月日かな | 19702 | 目つむりて青汁ぐつとばら真紅 | 199706 |
| 孫嫁のもうすぐ二人梅紅し | 19702 | 痛いとは生ける証しか梅雨の膝 | 199706 |
| お化粧で他人顔なり春写真 | 19702 | 梅雨鏡拭けば亡母にとれほどに | 199706 |
| 春障子四畳半の城明るし | 19702 | 都忘れ咲かせ老いけり京遠く | 199706 |
| 下萌に煎餅分ける愛犬に | 19702 | 今年また梅酒たまわる命かな | 199707 |
| 春耕をまぶしく見をりホーム窓 | 19703 | 子つばめの翔つを見送る車椅子 | 199707 |
| 啓室やシルバーホームの預け解け | 19703 | ナイターに興じる老母の片辺して | 199707 |
| 春暁の正夢なれや初ひ孫 | 19703 | 白髪といていのちあるもの髪洗ふ | 199707 |
| 向ひ合うパソコン句帖春炬燵 | 19703 | ぎょうさんな娘の悲鳴蜘蛛の糸 | 199707 |

| | | | |
|-----------------|--------|-----------------|----------|
| 郷ばなしつきずやさしき団扇かぜ | 199708 | 赤とんぼヘルパーと唄う車椅子 | 199709 |
| 夏服の派手を鏡に息子の土産 | 199708 | 星月夜シルバーホーム消灯はやき | 199709 |
| きれし夢惜しや貴船のはも料理 | 199708 | 誰似かと爽やかろんぎ初曾孫 | 199709 |
| 迎はるる仏とならで魂迎ふ | 199708 | 白桔梗時には欲しい母小言 | 19970900 |
| 仏めく盆僧の額黒光り | 199708 | おきし手を又も引きよす枝豆を | 19970900 |

第6章 母お気に入り句

端居して出世無縁の長寿眉

199607

この句は四国の故郷で読む故郷は香川県高松市国分 で、従弟の村上勝美宅を宿としていた。そこで村上勝美氏の眉を読んだ句。京鹿子の特選賞となり、数ページの誉め言葉があった。端居の季語は夏である。

初入日三六六の一を呑み 199601

三六六は閏年からくる。1996年は閏年だった。ひねった句。

朧夜や骨までしゃぶる瀬戸の味 19930400

四国高松で従弟の村上久夫さんに 鯛の兜煮 をご馳走になった。骨までしゃぶる は京鹿子の海道主宰から手紙で「骨までしゃぶる 全く感心いたしました 故郷はよいもの 良」と。故郷のあるものは倅ですね と

啓室やシルバーホームの預け解け 1997/03

1997年2月に。私と喜美子と清子さんの3人で ドイツ デュッセルドルフの郷生のマンションに10日間泊った。その間 母を湘南台の老人ホームに預けた。その帰国が丁度〰月上旬だったので。

春暁の正夢なれや初ひ孫 1997/03

清子さんが千里を懷妊したとの知らせをめでて。

第7章 年表

ふみ子略歴

明治四十三年 名古屋で大川清長女として誕生

大正九年 高松女学校入学

大正十四年 京都女子専門学校入学

卒業後一時故郷で先生をしていたが

ほとんど京都で下宿生活

昭和九年 太三郎と結婚

昭和十一年一月 大阪長柄にて竹四郎出産

昭和十一年九月 太三郎死去

昭和十九年 強制疎開で相川に越す

昭和二十年 終戦

昭和二十五年 相川文具店開店

昭和四十八年 俳句始める

昭和五十七年 水無瀬マンションに越す

昭和六十三年 鵜沼に越す
平成九年九月他界

年表

| 年号 | 西暦 | 句数 | すまゐ |
|-------|------|----|-----|
| 昭和四十八 | 1973 | 3 | 相川店 |
| 昭和四十九 | 1974 | 11 | 相貝店 |
| 昭和五十 | 1975 | 15 | 相川店 |
| 昭和五十一 | 1976 | 16 | 相貝店 |
| 昭和五十二 | 1977 | 17 | 相貝店 |
| 昭和五十三 | 1978 | 17 | 相貝店 |
| 昭和五十四 | 1979 | 26 | 相貝店 |
| 昭和五十五 | 1980 | 29 | 相貝店 |
| 昭和五十六 | 1981 | 78 | 相貝店 |
| 昭和五十七 | 1982 | 40 | 水無瀬 |
| 昭和五十八 | 1983 | 37 | 水無瀬 |
| 昭和五十九 | 1984 | 45 | 水無瀬 |
| 昭和六十 | 1985 | 39 | 水無瀬 |
| 昭和六十一 | 1986 | 41 | 水無瀬 |
| 昭和六十二 | 1987 | 45 | 水無瀬 |
| 昭和六十三 | 1988 | 49 | 鵜沼 |

平成元年 1989.58 鵜沼
 平成二年 1990.57 鵜沼
 平成三年 1991.57 鵜沼
 平成四年 1992.69 鵜沼
 平成五年 1993.75 鵜沼
 平成六年 1994.74 鵜沼
 平成七年 1995.67 鵜沼
 平成八年 1996.38 鵜沼
 平成九年 1997.43 鵜沼 十月歿す

句日記に登場する人々の紹介（敬称略）

・女学校のクラスメート

増田君子、小木原清子、生島孝子、小汐逸子、伊藤カネ、豊辺幸子、請川カツ

・女専のクラスメート

前田のぶこ、浅野房子、磯川きよこ 高田ヨシ子、高橋法子、藤本悦子、池内よしえ、吉川美佐、塩見よしこ、山下光子、佐久間静子、小林ふじ

・相川文具店の関係者

細井輝雄 細井恵美子 細井整 青山さん

・家族

福井百合子（長女）、笹倉聖子（次女）、飯田不二子（三女）、吉川竹四郎（私）、喜美子（竹四郎の妻）、直紀（孫竹四郎の長男） 郷生（クニオ 孫 竹四郎の次男）

・親類

大川一善(弟) 大川安子(妻) 千田和彦(甥) 千田多香子 千田香代子 千田敏夫(甥)
(従弟) 大川一幸(従弟) 笹倉温子(聖子の娘) 福井陽子(百合子の娘) 村上久夫(従弟) 村上勝美

あとがき

母は句集の出版を望んでいなかったのですが、横山実習室に放置したままだったが、

<http://www.geocities.jp/takefumi1604/index.html>

横山実習室へはいまでも「横山実習室 検索」で入れるがヒットしたのには私の身辺整理に一環として このノート
の添え書き部分も 「EXファイル」にしてみた。 鶴沼 句日記執筆がヒットしたのには驚いた。 かつては「イッ」で
検索すると「大月夜唐招提寺の庭にイッ」 平成三十年四月から始めて 3ヶ月 かかった
この本を印刷するつもりはないが、pdf で配布できるようにしたのが私の役目だった
1000句のなかで 母おきにいりの句を 第3章にまとめてみた。 そのなかで

端居して出世無縁の長寿眉

を代表作としたい。

平成三十年七月

吉川竹四郎